神仙眞祕訣。父子不相傳。三月桃花浪。金鱗飛上天。
恭惟某。如幻三昧。五十五年。金烏玉兎。滄海桑田。
即今行脚。一箭離弦。貶眼蹉過。十萬八千。行脚事大。
如何指宣。(擲火把)江碧鳥愈白。山青花欲燃。(川僧)

神仙の眞祕訣。父子相傳へず。三月桃花の浪。金鱗飛んで天に上る。恭しく惟れば某。如幻三昧。五十五年。金烏玉兎。滄海桑田。即今行脚。一箭弦を離る。眼を貶すれば蹉過す。十萬八千。行脚の事大なり。如何んが指宣せん。(火把を擲つて)江碧にして鳥愈白く。山青うして花燃んと欲す。

其一六　上座(火)

洞然明白。寶鑑當臺。胡漢俱隱。胡漢俱來。恭惟某。
照鑑明明無私曲。此中何處惹塵埃。萬象森羅皆影現。
匣奩信手一時開。磨與未磨强分別。寂而常照遍九垓。
今日當機纔打破。乾坤大地盡摧頹。正與麽時。上座向
甚麽處安身立命。(炬)甕裡無端走却鼈。燈籠露柱笑哈
哈。(川僧)

洞然明白。寶鑑臺に當る。胡漢俱に隱れ。胡漢俱に來る。恭しく惟れば某。照鑑明明私曲なし。此の中何處にか塵埃を惹かん。萬象森羅皆影を現ず。匣奩手に信せて一時に開き。磨と未磨と强ひて分別す。寂にして常照九垓に遍ねし。今日當機纔に打破し。乾坤大地盡く摧頹す。正與麽の時。上座甚麽の處に向つて安身立命せん。(炬)甕裡端なく鼈を走却して。燈籠露柱笑ひ哈哈。

其一七　上座(火)

大道體寬不見麽。虛空大地及山河。箇中若有易難意。

白雲萬里路頭多。恭惟某。脫體大道無罣碍。白蓮放開石盤陀。今朝挿向紅爐上。香氣馥郁影婆娑。灰飛火滅猶歷歷。等閑眨眼便蹉過。諸人還知落處麽也無。（炬）弓弦未發。箭過新羅。（川僧）

大道體寬見ずや。虛空大地及び山河。箇中若し易難の意あらば。白雲萬里路頭多し。恭しく惟れば某。脫體大道罣碍なし。白蓮放開す石盤陀。今朝紅爐上に挿向すれば。香氣馥郁影婆娑。灰飛び火滅して猶歷歷。等閑に眼を眨すれば便ち蹉過す。諸人還つて落處を知るや也無や。（炬）弓弦未だ發せず。箭新羅を過ぐ。

其一八　上座（火）

參無參處。如是實參。善財錯錯。到百城南。恭惟某。不踏童子舊途轍。歸去故山一茅庵。德雲相見已七八。慈氏彈指墮二三。箇中別有轉身路。即今上座甘不甘。（炬）山花開似錦。澗水湛如藍。（川僧）

參無參の處。如是實參。善財錯錯。百城の南に到る。恭しく惟れば某。童子の舊途轍を踏まず。歸去す故山の一茅庵。德雲の相見已に七八。慈氏の彈指二三に墮す。箇中別に轉身の路あり。即今上座甘甘ならず。（炬）山花開いて錦に似たり。澗水湛へて藍の如し。

其一九　上座（火）

大珪不琢自圓成。照破山河萬朶明。今日機前擊碎看。火星迸出怒雷轟。恭惟某。假借四大。以爲一生。世緣已畢。掉臂便行。掀飜煩惱海。踢倒涅槃城。刹刹無朕迹。頭頭露眼睛。捨事入理。則玉馬過關方半夜。借位就功。則木鷄喚月恰三月。所以。本來去去。妙用縱橫。

全無拘束。豈渉途程。雖然與麽。上來葛藤盡是功勳邊事。且道。末後一句。畢竟作麽生。（炬）身上袈裟無一截。草鞋落地作金聲。（川僧）

太珪琢かず自ら圓成。山河を照破して萬朶明かなり。今日機前擊碎して看よ。火星迸出し怒雷轟く。恭しく惟れば某。四大を假借して。以て一生と爲す。世緣已に畢つて。臂を掉つて便ち行く。煩惱海を掀飜し。涅槃城を踢倒す。刹刹朕迹なく。頭頭眼睛を露はす。事を捨て理に入る。則ち玉馬關を過ぎて方に半夜。位を借て功に就く。則ち木鷄月を喚ぶ恰も三月。所以に。本來去去。妙用縱横。全く拘束なし。豈に途程に渉らんや。然も與麽なりと雖も。上來の葛藤盡く是れ功勳邊の事。且らく道へ。末後の一句。畢竟作麽生。（炬）身上の袈裟一截なし。草鞋地に落ちて金聲を作す。

其二〇　上座（火）

念汝求師明大事。半月識得主人翁。四蛇咬倒無根樹。撲落虛空不見蹤。通身富貴。徹骨貧窮。了無生滅法。烈燄亙天紅。（佛光）

念ふ汝師を求めて大事を明めしことを。半月にして識得す主人翁。四蛇咬倒す無根の樹。虛空を撲落して蹤を見ず。通身の富貴。徹骨の貧窮。無生滅の法を了ずれば。烈燄天に亙つて紅なり。

其二一　上座（火）

生死中無物。即無生死。生死中有物。即不迷生死。如是如是。不是不是。（火）我見燈明佛。本光瑞如此。（佛光）

生死の中物なければ。即ち生死なし。生死の中物あれば。即ち生死に迷はず。如是如是。不是不是。（火）我見燈明佛。本光瑞此の如し。

其二二　上座（土）

截斷生死流。頓登彌勒樓。眞箇英靈漢。不敢打靜毬。勿言夜壑移舟去。卻現全身百艸頭。（曹海）

生死の流を截斷し。頓に彌勒の樓に登る。眞箇英靈の漢。敢て靜毬を打せず。言ふこと勿かれ夜壑に舟を移し去ると。卻つて全身を現ず百艸頭。

其二三　上座（火）

五蘊非有。四大本空。泥牛夜吼澄潭月。木馬時嘶碧落風。只如亡僧面前觸目菩提。且作麼生和會。（以火把打圓相）其或未委悉。大家問取丙丁童。（寂室）

五蘊有にあらず。四大本空なり。泥牛夜吼ゆ澄潭の月。木馬時に嘶く碧落の風。只亡僧面前觸目菩提の如き。且らく作麼生かが和會せん。（火把を以て圓相を打して）其れ或は未だ委悉せずんば。大家丙丁童に問取せよ。

其二四　上座（火）

十方無碧落。蟭螟眼裡放夜市。四面又無門。大蟲舌頭打鞦韆。非是神通妙用。又不法爾如然。三世心盡。表裡情忘。故道。生死去來。空華影謝。菩提涅槃。陽焰飜波。某。若能恁麼荐取。即看南嶽磨甎。枉用工夫。仰山撲破。强弄精魂。若未然。一番雨過一番凉。八月秋光何處熱。（曹海）

十方に碧落なく。蟾螟眼裡夜市を放つ。四面又無門。大蟲舌頭鞦韆を打す。是れ神通妙用にあらず。又法爾如然にあらず。三世心盡き。表裡情忘ず。故に道ふ。生死去來。空華影謝し。菩提涅槃。陽焰波に飜へると。某。若し能く恁麼に荐取せば。即ち看る南嶽の磨甎。枉て工夫を用ひ。仰山の撲破。强ひて精魂を弄することを。若し未だ然らずんば。一番雨過ぎて一番涼し。八月秋光何處か熱す。

其二五　上座（土）

違順相爭。是爲心病。與麼葛藤。笊籬添柄。即今上座。還識三祖大師敗闕處麼。寰中天子勅。塞外將軍令。（川僧）

違順相爭ふ。是れを心病と爲す。與麼の葛藤。笊籬柄を添ふ。即今上座。還つて三祖大師敗闕の處を識るや。寰中は天子の勅。塞外は將軍の令。

其二六　上座（火）

深而無涯岸。廣而沒邊量。超越三際。通徹十方。淨躶躶全脫窠臼。赤灑灑杳絕承當。不思議解脫道。無不由寂場。者個是某天眞證得底活三昧也。即今末後歸眞一句。作麼生全提。（擲火把）木凋葉落。體露金風。（曹海）

深うして涯岸なし。廣うして邊量を沒す。三際を超越し。十方に通徹す。淨躶躶全く窠臼を脫す。赤灑灑杳として承當を絕す。不思議解脫の道。寂場に由らざるなし。者個は是れ某か天眞證得底の活三昧なり。即今末後歸眞の一句。作麼生が全提せん。（火把を擲つて）木凋み葉落つ。體露全風。

大師（火）

五蘊山中一卷經。經中字義炳然明。誰知只這分明處。
梵語唐言譯不成。某。生平看閲諸部經典。還識這一卷
經麽。五十二年。絶塵脱俗。削髪披緇。全得此經受用。
二六時中。飢餐渴飲。閒坐困眠。亦得此經受用。即今
生滅滅已。寂滅現前。又孰是此經。孰非此經。看看。
火把子出廣長舌。演説斯義去也。（打圓相）以字不成八
不是。火裏螂蟟呑鼈鼻。（虚堂）

五蘊山中一卷の經。經中の字義炳然として明なり。誰か知らん只
這の分明の處。梵語唐言譯すれとも成らず。某。生平諸部の經
典を看閲す。還つて這の一卷の經を識るや。五十二年。絶塵脱俗。
削髪披緇。全く此の經の受用を得。二六時中。飢餐渴飲。閒坐
困眠。亦此の經の受用を得。即今生滅滅し已つて。寂滅現前す。
又孰れか是れ此の經。孰れか此の經にあらざらん。看よ看よ。
火把子廣長舌を出だして。斯の義を演説し去る。（圓相を打して）
以字不成八不是。火裏螂蟟鼈鼻を呑む。

律師（火）

伏惟某律師。承家世於武略而大施忠義。寄形服於緇門
而普行佛事。平生慕少林直指之道。栖賢法席甲一方。
末後歸淨土即往之心。蓮華世界超九品。去來若在啓手
足。生死須如遊園觀。四十八年幻夢斷。八萬四千塵勞
盡。鐵馬衝開碧海門。木雞啄破黄金殼。盡大地人都不
見。只許火焰説熾然。苦熱解煩開鬱蒙。清涼玉露送金
風。明明活路如絃直。面目何曾隔劫空。（清溪）

伏して惟れば某律師。家世を武略に承けて大いに忠義を施し。形服を緇門に寄せて普く佛事を行ず。平生少林直指の道を慕ひ。栖賢法席一方に甲たり。末後淨土即往の心に歸し。蓮華世界九品を超ふ。去來手足を啓くあるが若く。生死須らく園觀に遊ぶが如くすべし。四十八年幻夢斷え。八萬四千塵勞盡く。鐵馬衝開す碧海の門。木雞啄破す黃金の殼。盡大地人都て見ず。只許す火焰熾然を說き。苦熱煩を解いて鬱蒸を開くことを。清涼玉露金風を送る。明明たる活路絃の直きが如し。面目何んぞ曾て劫空を隔てん。

書記（火）

此是宗門直指才。當機踢倒涅槃臺。無陰陽地春風轉。火裡優曇朶朶開。恭惟某。居翰墨任。負棟梁材。提撕多福話頭。三年受用只栽竹。漏洩少室祖意。一日工夫半爲梅。生也石火光中留不住。死也閃電機裡喚不回。觸向上鉗鎚下。虛空消鐵山摧。到這裏。何物恁麼去。何物恁麼來。某。還會麼。（擲火）燈籠沿壁上天台。喝。

（大休）

此れは是れ宗門直指の才。當機踢倒す涅槃臺。無陰陽の地春風轉じ。火裡の優曇朶朶開く。恭しく惟れば某。翰墨の任に居り。棟梁の材を負ふ。多福の話頭を提撕し。三年の受用只竹を栽ゆ。少室の祖意を漏洩し。一日の工夫半ば梅の爲なり。生や石火光中留むれども住せず。死や閃電機裡喚べども回らず。向上の鉗鎚下に觸れ。虛空消し鐵山摧く。這裏に至つて。何に物か恁麼に去り。何に物か恁麼に來たる。某。還つて會すや。（火を擲つ

て）燈籠壁に沿ふて天台に上る。喝。

知客（火）

全主復全賓。當機要驗人。不拈栢樹子。生怕惡聲名。
且道。與四面顯知客。是同是別。若道是同捕風。若道
是別捉月。同則始終同。別則始終別。某。蹈斷江西十
八灘。從教水底火燒天。（北礀）

全主復全賓。當機人を驗むるを要す。栢樹子を拈ぜず。生怕や
惡聲名。且らく道へ。四面の顯知客と。是れ同か是れ別か。若
し是れ同と道はゞ風を捕ふ。若し是れ別と道はゞ月を捉ふ。同
なるときんば始終同。別なるときんば始終別。某。江西十八灘
を蹈斷す。從教ばあれ水底の火天を燒くことを。

其一　知藏（火）

最初一句。末後牢關。直透過看。綠水青山。夫惟某。
道肥貌疲。年老心閒。掌大小藏鑰。列東西序班。方袍
菌蒼。圓頂栴檀。位超十地已上。前輩芍藥。後生荼莉。
時丁二佛中間。因則用因。果則用果。愚而不愚。頑而
不頑。破草鞋三文兩文。雲無心出岫。折拄杖七尺八尺。
鳥倦飛知還。此是某平生著力底。若復向上轉。文殊普
賢失其境界。德山臨濟猶隔塵寰。到這裏。說妙罪過。
道禪慚顏。撒手長空外。可望不可攀。雖然恁麼。虎斑
易見。誰窺人斑。（擲火）聞麼雪峰南趙州北。還鄉曲調
菩薩蠻。咄。（大休）

最初の一句。末後の牢關。直に透過して看よ。綠水青山。夫れ
惟れば某。道肥えて貌疲れ。年老いて心閒なり。大小の藏鑰を

掌り。東西の序班に列す。方袍の菡萏。圓頂の栴檀。位十地已上を超ふ。前輩の芍藥。後生の荈莉。時に二佛の中間に丁る。因には因を用ひ。果には果を用ゆ。愚にして愚ならず。頑にして頑ならず。破草鞋三文兩文。雲無心にして岫を出づ。折拄杖七尺八尺。鳥飛び倦んで還ることを知る。此は是れ某が平生の著力底。若し復向上に轉ぜば。文殊普賢其の境界を失ひ。德山臨濟猶塵寰を隔つ。這裏に到つて。妙と說くも罪過。禪と道ふも慚顏。手を長空の外に撒して。望むべくして攀づべからず。然も恁麼なり〻雖も。虎斑は見易く。誰か人斑を窺はん。(火を擲つて)聞くや雪峰は南趙州は北。還鄕の曲調菩薩蠻。喝。

其二　知藏（火）

脫下舊爛衫。舞起新秋曲。秋水舞清光。秋山舞蒼綠。舞罷秋風歸去來。萬古秋蟾寒泚玉。某且道。脫下舊爛衫。向甚處安着。咦。丙丁童子趂風流。借作送行歌一曲。（長翁）

舊爛衫を脫下し。新秋の曲を舞起す。秋水清光を舞し。秋山蒼綠を舞す。舞ひ罷んで秋風歸去來。萬古秋蟾寒うして玉を泚まし。某。且らく道へ。舊爛衫を脫下し。甚麼の處に向つて安着すや。咦。丙丁童子風流を趂ひ。借り作す送行の歌一曲。

知浴（火）

（以火把打圓相）見麼。喚作圓相則背。不喚作圓相則觸。透過兩重關。還他親屬。蓮峰突出碓觜花。杓柄蹈飜師子足。香水沉沉徹底乾。普請大家齊刮目。且道看甚麼。（擲火）脫殼神龜飛上天。無位眞人火中浴。（中峰）

（火把を以て圓相を打して）見るや。喚んで圓相と作せば則ち背き。喚んで圓相と作さずんば則ち觸る。兩重の關を透過し。他の親屬に還る。蓮峰突出す碓觜の花。杓柄蹈飜す師子の足。香水沈沈底に徹して乾き。普請の大家齊しく目を刮す。且らく道へ甚麼をか看るや。（火を擲つて）脫殼の神龜飛んで天に上り。無位の眞人火中に浴す。

其一　庵主（火）

常光現前。壁立萬仞。生死涅槃。本來清淨。貧窮孤露。是眞道場。如火宅中。示以清涼。庵內不知庵外事。（橫川）

堆紅爐藕花香。

常光現前。壁立萬仞。生死涅槃。本來清淨。貧窮孤露。是れ眞の道場。火宅の中示すに清涼を以てするが如し。庵內知らず庵外の事。一堆の紅爐藕花香し。

其二　庵主（火）

欲識金剛不壞性。倚天長劍射人寒。爲君今日新拈出。烈燄堆頭雪一團。恭惟某。有麼有麼。虎踞龍蟠。竪拳消息。鐵作心肝。不泊船處。平地波瀾。縱奪殺活。空裡磨盤。雖然與麼。某卽今踏著末後牢關一句。如何涉舌端。（炬）珊瑚樹林日杲杲。十洲春盡花凋殘。（川僧）

金剛不壞の性を識らんと欲せば。天に倚る長劍人を射て寒し。君が爲に今日新に拈出す。烈燄堆頭雪一團。恭しく惟れば某。有りや有りや。虎踞龍蟠。竪拳の消息。鐵作の心肝。船を泊する處にあらず。平地の波瀾。縱奪殺活。空裡の磨盤。然も與麼なりと雖も。某卽今末後牢關を踏著する一句。如何んか舌端に

渉らん。（炬）珊瑚枝上日杲々。十洲春盡きて花凋殘す。

塔主（火）

塔中主誰か委悉。眼卓朔鼻脩直。相共行不二相識一。謾道今年七十七。（以火打二圓相一）還見麽。根選圓通爲二第一一。

（高原）

塔中の主誰か委悉す。眼卓朔鼻脩直。相共に行いて相識らず。謾に道ふ今年七十七と。（火を以て圓相を打して）還つて見るや。根選圓通を第一と爲す。

知倉（火）

平生萬事足。知レ足常自足。所レ欠惟一死。今朝死亦足。生也足死也足。種種足無レ不レ足。且如何是足底事。泥揑金剛水底行。紙畫天神火中浴。（無準）

（平生萬事足る。足るを知れば常に自から足る。欠く所惟一死のみ。今朝死亦足る。生足り死足る。種種足つて足らざるなし。且らく如何んが是れ足る底の事。泥揑の金剛水底に行き。紙畫の天神火中に浴す。

其一　淨人（火）

侍二吾方丈裡一。聽二吾講清規一。合掌進前。叉手退後。一行一步。知レ禮知レ儀。忽地飜レ身珍重去。菩提無レ樹亦無レ枝。正與麽時。生也不レ道。雲駛月運。死也不レ道。舟行岸移。畢竟何以爲レ驗。（竪二起火把一）黃梅衣鉢非二吾付一。火把拈來度二與伊一。（義堂）

吾が方丈裡に侍し。吾が清規を講ずるを聽く。合掌進前。叉手退後。一行一步。禮を知り儀を知る。忽地身を飜へし珍重して

去る。菩提樹なく亦枝なし。正與麼の時。生とも道はず。雲駛せ月運ぶ。死とも道はず。舟行き岸移る。畢竟何にを以てか驗とせん。（火把を竪起して）黄梅の衣鉢吾が付にあらず。火把を拈じ來つて伊に度與せん。

其二　淨人（火）

你不レ知二生處死處一。是心未レ了。你鬚髮不曾得除。是身未レ了。我一把火都與レ你。了二却祖師道一。了得身心本性空。斯人與レ佛何殊別。（横川）

你生處死處を知らず。是の心未だ了ぜざるなり。你が鬚髮曾て除くことを得ず。是の身未だ了ぜざるなり。我が一把の火都て你に與へて。祖師道を了却せしめん。身心を了得すれば本來空なり。斯の人佛と何んぞ殊別せん。

洒掃（火）

風清月皓秋光好。霧歛天晴爽氣浮。寂滅道場只這是。何須向レ外覓二歸休一。伏惟某。稟二業文士一。輔二政武門一。寄二身宰官一。醉二心祖道一。可レ謂一舉兩得。乃是末運上流。五十三年幻夢已破。四生九有業緣何拘。玉象踏飜鏡裏空。新羅夜半日頭出。如是快活底時節。火裡蓮華徧界香。（夢窻）

風清く月皓うして秋光好し。霧歛まり天晴れて爽氣浮ぶ。寂滅道場只這是。何んぞ須ゐん外に向つて歸休を覓むることを。伏して惟れば某。業を文士に稟け。政を武門に輔く。身を宰官に寄せ。心を祖道に醉はしむ。謂つべし一舉兩得と。乃ち是れ末運の上流。五十三年幻夢已に破る。四生九有業緣何んぞ拘らん。

玉象踏飜して鏡裏空し。新羅夜半日頭出づ。如是快活底の時節。
火裡の蓮華徧界香し。

監厨（火）

最初一句。老盧錯舉。明鏡非臺。菩提無樹。流落叢林。幾百年。展轉相傳成死語。爭似山中初生公。用處天然超佛祖。饐鑼鎚子。曾慣赤手做來。酸餡饅頭。幾度從空揑聚。如今颺下一時休。不顧衣盂笑歸去。空索索寂寥寥。本來既是渾無物。破屋從教野火燒。（斷橋）

最初の一句。老盧錯つて舉す。明鏡臺にあらず。菩提樹なし。
叢林に流落す幾百年。展轉相傳ひて死語と成る。爭てか似かん
山中の初生公。用處天然佛祖を超ふ。饐鑼の鎚子。曾て赤手の
敲來に慣れ。酸餡の饅頭。幾度か空從り揑聚す。如今颺下して
一時に休す。衣盂を顧みず笑つて歸り去る。空索索寂寥寥。本
來既に是れ物なし。破屋從教あれ野火の燒くことを。

鐘頭（火）

洪鐘在虛。扣之則鳴。須不隔垣墻。要腕頭有力。半夜
打開霜月白。五更撞動曉風寒。大聲小聲無不圓通。好
夢惡夢一時驚破。纔涉恁麼不恁麼。白日青天。飛星撒
火。（北澗）

洪鐘虛にあり。之を扣けば鳴る。須らく垣墻を隔てざるべし。
腕頭力あるを要す。半夜打開すれば霜月白し。五更撞動すれば
曉風寒し。大聲小聲圓通ならざるなく。好夢惡夢一時に驚破す。
纔に恁麼不恁麼に涉らば。白日青天。飛星火を撒す。

街坊（火）

某。街頭見什麼。街尾逢阿誰。一拳無面目。是汝命亨時。活活也知不知。（擲火）四世界內。火亂星飛。（橫川）

某。街頭什麼をか見。街尾阿誰そに逢ふ。一拳面目なし。是れ汝命亨の時。活活知不知。（火を擲つて）四世界の內。火亂れ星飛ぶ。

其一　禪人（火）

脚頭踢倒大虛空。生死牢關活路通。三十年來閒無事。閻浮夢覺一樓鐘。恭惟某。詹詹言直。醇道公。夙聞臨濟正宗。衣盂傳授。殆嘗佛智妙蜜。醍醐味同。孤迥迥峭巍巍。青雲碧落。淨躶躶赤洒洒。明月淸風。到這裏。華池寶所阿鼻獄。火聚刀山都率宮。此是禪人平生作略。即今歸源性無二一句子。諸人如何研究。（炬）舜若多神拍手笑。轉風車子丙丁童。咄。（大休）

脚頭踢倒す大虛空。生死の牢關活路通ず。三十年來閒無事。閻浮夢覺む一樓の鐘。恭しく惟れば某。詹々言直。醇醇道公。夙に臨濟の正宗を聞き。衣盂傳授し。殆ど佛智の妙蜜を嘗め。醍醐味を同うす。孤迥迥。峭巍巍。青雲碧落。淨躶躶赤洒洒。明月淸風。這裏に到つて。華池寶所も阿鼻獄。火聚刀山も都率宮。此は是れ禪人平生の作略。即今歸源性無二の一句子。諸人如何んが研究せん。（炬）舜若多神手を拍て笑ふ。轉風車子丙丁童。咄。

其二　禪人（火）

實相眞如畢竟空。盡將世事付槐宮。看看生死涅槃體。柳自綠兮花自紅。恭惟某。律儀秋冷。和氣春融。其威雄也。騎九萬金翅。驚走千里騎射。其作略也。牧一箇鐵牛。推倒三尺牧童。雖無管仲會諸侯匡天下。如同陶

公稱宰相隱山中。岳色江聲。明歷歷沒窠臼。月華星彩。
淨躶躶絕己躬。到這裏。不拘十惡五逆。豈覓八解六通。
正與麽時。某。與冥官要論蓋代功麽。（以火把打空）閣
老面前行正令。鑊湯爐炭落花風。喝。（景堂）
實相眞如畢竟空。盡く世事を將て槐宮に付す。看よ看よ生死涅
槃の體。柳自から綠に花自から紅なり。恭しく惟れば某。律儀
秋冷に。和氣春融なり。其の威雄や。九萬の金翅に騎り。千里
の騎射を驚走す。其の作略や。一箇の鐵牛を牧し。三尺の牧童
を推倒す。管仲諸侯を會して天下を匡すなしと雖も。陶公宰相
と稱して山中に隱るゝに如同す。岳色江聲。明歷歷窠臼を沒し。
月華星彩。淨躶躶己躬を絕す。這裏に到つて。十惡五逆に拘ら
ず。豈に八解六通を覓めんや。正與麽の時。某。冥官と蓋代の
功を論ずることを要す。（火把を以て空を打して）閣老面前正令
を行ず。鑊湯爐炭落花の風。喝。

其一　尼首座（火）

大藏五千餘卷經。涅槃生死說叮嚀。南方佛法無多子。
火自紅兮柴自青。恭惟某。竹持晩節。菊制頹齡。雙放
雙收。具劉鐵磨手段。三歸三聚。存大愛道典型。棒正
覺喝正覺。罵雨師叱雷霆。蝶舞海棠風。佛界魔宮半醉
裡。鷄聲茅店月。地獄天堂一旅亭。了了了時不慕諸聖。
玄玄玄處不重己靈。石女打破業鏡。木人踢倒淨瓶。某
若要知向上事。截斷耳根諦聽。（擲火）築著帝釋鼻孔去。
輕羅小扇撲流螢。喝。（藍田）
大藏五千餘卷の經。涅槃生死說くこと叮嚀。南方佛法多子なし。

火自から紅に柴自から青し。恭しく惟れば某。竹は晩節を持し。菊は頽齡を制す。雙放雙收。劉鐵磨の手段を具す。三歸三聚。大愛道の典型を存す。棒正覺喝正覺。雨師を罵り雷霆を叱す。蝶は海棠の風に舞ふ。佛界魔宮半醉の裡。鷄聲茅店の月。地獄天堂一旅亭。了了了の時諸聖を慕はず。玄玄玄の處己靈を重んぜず。石女業鏡を打破し。木人淨瓶を踢倒す。某若し向上の事を知らんと要せば。耳根を截斷して諦聽せよ。(火を擲つて)帝釋の鼻孔を築著し去り。輕羅の小扇流螢を撲つ。喝。

其二　尼首座（火）

屍在這裡。靈何處去。蘭叢凋落。薰風徧野。死中活活中死。兩頭俱罷休。東山水上行。好箇時節。脫體現成。劫火堆中圓陀陀孤迥迥。虛空壞而這箇不壞。恁麼說話。有人聞麼。是什麼。咄。(拔除)

屍這裡にあり。靈何處にか去る。蘭叢凋落し。薰風野に徧ねし。死中の活活中の死。兩頭俱に罷休し。東山水上に行く。好箇の時節。脫體現成す。劫火堆中圓陀陀孤迥迥。虛空壞して這箇壞せず。恁麼の說話。人の聞くありや。是れ什麼ぞ。咄。

其三　尼首座（火）

不分迷悟絕凡聖。百歲光陰春夢中。春夢醒來無一事。桃花依舊面皮紅。恭惟某。心鏡淸淨。戒珠玲瓏。瞥轉一機。具劉鐵磨作略。掃除五障。躡僑曇彌遺蹤。狎行運動。理事圓融。文殊無文殊。胸中吉祥宅。彌勒有彌勒。天上兜率宮。了了了時。霞穿碧落。玄玄玄處。月拂清風。會麼。(炬)石火莫及。電光罔通。喝。(大休)

迷悟を分たず凡聖を絶す。百歳の光陰春夢の中。春夢醒め來つて一事なし。桃花舊に依つて面皮紅なり。恭しく惟れば某。心鏡清淨。戒珠玲瓏。一機を瞥轉して。劉鐵磨の作略を具し。五障を掃除して。憍曇彌の遺蹤を躡む。智行運動。理事圓融。文殊に文殊なし。胸中吉祥の宅。彌勒に彌勒あり。天上兜率の宮。了了了了の時。霞碧落を穿ち。玄玄玄の處。月清風を拂ふ。會すや。石火及ぶなく。電光通ずるなし。喝。

其四　尼首座（火）

澧洲路上老婆禪。不可得心作麼點。沒量德山下鬻難。滿盤油餻起猛燄。恭惟某。脫得少林赤肉團。全身堂堂不汚染。不汚染處著眼看。一片白珪本無玷。豈爲塵機作繫留。石火光中掣電閃。與麼履踐與麼時。閻羅老子難點檢。（炬）迅雷一聲。耳不及掩。（川僧）

澧州路上の老婆禪。不可得心作麼か點ぜん。沒量の德山鬻を下し難し。滿盤の油餻猛燄を起す。恭しく惟れば某。少林の赤肉團を脫得し。全身堂堂汚染せず。汚染せざる處眼を著けて看よ。一片の白珪本玷なし。豈に塵機の爲に繫留を作さん。石火光中電閃を掣す。與麼の履踐與麼の時。閻羅老子點檢すること難し。（炬）迅雷一聲。耳掩ふも及ばず。

其一　尼（火）

光明寂照秀才語。還墮雲門話墮機。重借丙丁童子手。韶陽老子發清輝。恭惟某。脫却娘生袴。披起福田衣。忽覺釋門之今是。漸知俗塵之昨非。作得一庵主。應免列壑譏。好箇履踐。水逝雲飛。三千里外。知音者稀。

（炬）　夜深水冷魚不レ食。滿船空載二明月一歸。（川僧）

光明寂照秀才の語。還つて雲門話墮の機に墮す。重ねて丙丁童子の手を借り。韶陽の老子清輝を發す。恭しく惟れば某。娘生の袴を脱却し。福田衣を披起し。忽ち釋門の今是を覺り。漸く俗塵の昨非を知る。一庵主と作り得て。應に列壑の譏を免かるべし。好箇の履踐。水逝き雲飛ぶ。三千里外。知音稀なり。（炬）

夜深く水冷にして魚食まず。滿船空しく明月を載せて歸る。

其二　尼（土）

年光五五證二圓通一。半熟黄粱一夢中。呼得若歸何處是。杜鵑枝上落花風。恭惟某。眉峰秀發。心地玲瓏。知敎外有禪。去歳入二吾室一受二衣鉢一。悟滅後歸寂。今日出二此界一脫二羅籠一。雜華資始。涅槃已終。公案現成。看睡麝繡石竹一。當陽直指。聞二啼鶯碧梧桐一。畢竟非二男相一非二女相一。端的了二人空一了二法空一。（大休）

年光五五圓通を證す。半熟の黄粱一夢の中。呼び得て若し歸らば何處か是なる。杜鵑枝上落花の風。恭しく惟れば某。眉峰秀發。心地玲瓏。敎外禪あるを知り。去歳我が室に入つて衣鉢を受け。滅後寂に歸するを悟り。今日此の界を出て羅籠を脫す。雜華資始。涅槃已終。公案現成。睡麝を繡石竹に看。當陽直指。啼鶯を碧梧桐に聞く。畢竟男相にあらず女相にあらず。端的人空を了じ法空を了ず。

其三　尼（火）

釋門正統苾芻尼。冷笑少林尼總持。夜半有レ人負將去。針鋒頭上五須彌。恭惟某。預示二鶴林滅度相一。不レ待二龍華

下生時。掃除眼裏花。則劍樹刀山卽眞如界。滅却心頭火。則鑊湯爐炭變清涼池。到這裏。說甚麼五障。論什麼三祇。機輪轉處。閃電猶遲。某。還會麼。欲問花來處。東君亦不知。喝。（大休）

釋門の正統苾蒭尼。冷笑す少林の尼總持。夜半人あり負ひ將ち去る。針鋒頭上の五須彌。恭し〳〵惟れば某。預め鶴林滅度の相を示し。龍華下生の時を待たず。眼裏の花を掃除すれば。則ち劍樹刀山卽眞如界。心頭の火と滅却すれば。則ち鑊湯爐炭清涼池と變ず。這裏に到つて。甚麼の五障を說き。什麼の三祇をか論ぜん。機輪轉ずる處。閃電猶遲し。某。還つて會すや。花の來處を問はんと欲すれば。東君も亦知らず。喝。

其一　沙彌（火）

觀其音聲。皆得解脫。聲前一音。如何觀取。瘂子傳遠信。十道不通風。某。四大本空。一靈何形。火中蓮華。體露眞常。（拔隊）

其の音聲を觀ずれば。皆解脫を得。聲前の一音。如何んか觀取せん。瘂子遠信を傳へ。十道風を通ぜず。某。四大本空。一靈何んの形ぞ。火中の蓮華。體露眞常。

其二　沙彌（土）

我手佛手。提折脚鐺。生緣何處。掉臂直行。某。三關透過。一路分明。分明一句。如何錄呈。（以鑊打地三下）天上天下。埋却一坑。（川僧）

我が手佛手。折脚鐺を提ぐ。生緣何處ぞ。臂を掉つて直に行く。某。三關透過。一路分明。分明の一句。如何んか錄呈せん。

（鑊を以て地を打つこと三下）天上天下。一坑に埋却す。

其三　沙彌（火）

了得本心心境融。分明物我一如同。此中何處著生滅。
廓落虚空絶始終。某。若能恁麼荐取。塵劫來來秖這箇。
湛然靜坐率陀宮。其或未然。劫火洞然毫末盡。青山依舊白雲中。（曹海）

本心を了得すれば心境融ず。分明物我一如同。此の中何處にか生滅を著けん。廓落たる虚空始終を絶す。某若し能く恁麼に荐取せば。塵劫來來秖這箇。湛然靜坐す率陀宮。其れ或は未だ然らずんば。劫火洞然毫末盡き。青山舊に依つて白雲の中。

其四　沙彌（土）

惜哉呼合稱家童。光景十三命忽終。兒戲場中歸歟曲。倒騎竹馬舞秋風。（鐵山）

惜い哉呼んで合に家童と稱すべし。光景十三命忽ち終る。兒戲場中歸歟の曲。倒に竹馬に騎つて秋風に舞ふ。

其五　沙彌（土）

昨日陽春來。今日騰雲去。來者當可來而來矣。所以任意逼塞乾坤。去者當可去而去矣。所以掉臂不顧東西。雖然與麼。春逼塞乾坤。未曾從乾坤外來。人不顧東西。何去東西內。若又要知活卓地處。直須參得箇拄杖子始得。何故如是。爲是他和東西吞却乾坤了。這箇拄杖子。即今在什麼處。（卓拄杖一下）禮拜著。（玄樓）

昨日陽春來る。今日雲に騰り去る。來者は來るべきに當つて而うして來る。所以に意に任せて乾坤に逼塞す。去者は去るべき

に當つて去る。所以に臂を掉つて東西を顧りみず。然も與麼なりと雖も。春乾坤に逼塞して。未だ曾て乾坤の外より來らず。人東西を顧みず。何んぞ東西の內を出でん。若し又活卓卓地の處を知らんと要せば。直に須らく箇の拄杖子に參得して始めて得べし。何んが故に是の如くなる。是れ他の東西に和し乾坤を呑却し了れるが爲めなり。這箇の拄杖子。即今什麼の處にかある。（拄杖を卓すること一下して）禮拜著。

亡僧（火）

象骨峰前。虛空撲落。烏石嶺頭。紅旗閃爍。涅槃臺上。西方極樂。山僧手中。末後一著。（以火炬指大衆又指亡僧）開眼也著。合眼也著。（東山）

象骨峰前。虛空撲落。烏石嶺頭。紅旗閃爍。涅槃臺上。西方極樂。山僧手中。末後一著。（火炬を以て大衆を指し又亡僧を指して）開眼するも也著。合眼するも也著。

第二　奠湯香語

其一　和尚

醍醐上味不ㇾ關ㇾ功。香帶正偏豈犯ㇾ中。唇毀齒寒無ㇾ力ㇾ餞。盌心白浪起二悲風一。恭以某。脫二白膽老一。佩二印兀翁一。度門和ㇾ光。固二密密三昧一。滅場刮ㇾ篤。轄二塵塵圓通一。居蟄梭失二雷鳴一落。塤篪器剩半座空。卽今臨行端的。纔印二盞子一酪明二乳中一。和尚作麼退步。呑二却乳中酪水一。比丘甚無ㇾ端。

（拂一拂）山色空濛君不ㇾ見。雨中杲日半天紅。（洞水）

醍醐の上味功に關せず。香帶正偏豈に中を犯さんや。唇毀れ齒寒うして餞するに力なし。盌心の白浪悲風を起す。恭しく以れば某。白を膽老に脫し。印を兀翁に佩ぶ。度門光りを和げ。密密の三昧を固うす。滅場篤を刮して。塵塵の圓通を轄す。居蟄の梭雷鳴を失して落ち。塤篪の器半座を剩して空し。即今臨行の端的。纔に盞子を印すれば酪乳中に明なり。和尚作麼か退歩して。乳中の酪水を呑却せん。比丘甚だ端なし。（拂一拂して）山色空濛君見えず。雨中杲日半天紅なり。

其二　和尚

法雨沾來曾不ㇾ乾。何須向ㇾ外汲二靈泉一。長生假有二還丹妙一。如二孰空門一味傳一。某。溫冷適ㇾ意。辛苦極ㇾ玄。六年以前。吾首座來而已分二半榻一。今月此日。吾首座去也聊賸二一煎一。脫二印大器大成之緣一。常安門下。忘二了長福長久之計一。喜覺山巔。此是和尚三十年。晨午不欠底炊饘。旦道。末後以ㇾ何濡二喉咽一。一聲杜宇松風里。驚覺蓬萊不老仙。（鼎山）

法雨沾し來たつて曾て乾かず。何んぞ須ゐん外に向つて靈泉を汲むことを。長生假ひ還丹の妙あるも。空門一味の傳に孰如れ。某。溫冷意に適い。辛苦玄を極む。六年以前。吾首座として來たりて已に半榻を分ち。今月此の日。吾首座とし去るや聊か一煎を贐す。大器大成の緣を脫却す。常安の門下。長福長久の計を忘了す。喜覺の山巔。此れは是れ和尙が三十年。晨午不欠底の炊饘なり。旦らく道へ。末後何にを以てか喉咽を濡さん。一聲杜宇松風の里。驚き覺ます蓬萊の不老仙。

其三　和尙

云何酬ㇾ價廬陵米。抹作禪林無味湯。這箇家傳眞祕術。神仙未必有斯方。（擧ㇾ盞）這箇是頤心妙術。換骨靈方。元無滋味。那存色香。得ㇾ之則頓截斷生死病根。用ㇾ之則忽洗清無明熱腸。某。即今云何下ㇾ嘴。露。剝地識情俱裂斷。鑊湯爐炭也清涼。（曹海）

云何んか價を酬ゐん廬陵米。抹して禪林無味の湯と作す。這箇は家傳の眞祕術。神仙未だ必ずしも斯の方あらず。（盞を擧して）這箇は是れ頤心の妙術。換骨の靈方。元滋味なし。那んぞ色香を存せん。之れを得れば頓に生死の病根を截斷し。之れを用ゆれば忽ち無明の熱腸を洗清す。某。即今云何んか嘴を下さん。露。剝地識情俱に裂斷す。鑊湯爐炭も也清涼。

其四　和尙

五據ㇾ要津。機用俱活。信ㇾ手拈來。醍醐毒藥。瞑眩處一味平和。甘甜中十分毒辣。雙放雙收。全殺全活。箇是某一生受用不盡秘方。今日借ㇾ水獻ㇾ花。當ㇾ機不ㇾ讓。一盃

寒淥致慇懃。開口不在舌頭上。（大用）

五たび要津に據る。機用倶に活す。手に信せ拈じ來たる。醍醐毒藥。瞑眩の處一味の平和。甘甜の中十分の毒辣。雙放雙收。全殺全活。箇は是れ某が一生受用不盡の秘方。今日水を借り花を獻ず。機に當つて讓らず。一盃の寒淥慇懃を致す。口を開けば舌頭上にあらず。

其五　和尚

盡大地一草一葉。信手採來總十方。一根一莖拈得便用。依稀毒藥。彷彿醍醐。從上佛祖覷之。則瞎却眼睛。天下衲僧嗅之。則穿過鼻孔。而今轉位回機。聊一盃奉供某和尚。莫恠空疎。伏惟珍重。（是翁）

盡大地一草一葉。手に信せ採り來たる總て十方。一根一莖拈得して便ち用ゆ。依稀たる毒藥。彷彿たる醍醐。從上の佛祖之れを覷ひば眼睛を瞎却し。天下の衲僧之れを嗅けば。鼻孔を穿過す。而今轉位回機。聊か一盃を某和尚に供へ奉つる。空疎を恠しむこと莫れ。伏して惟れば珍重。

其六　和尚

起佛祖膏肓病。活衲僧必死疾。不是砒礪。亦非崖蜜。今日因甚嚥不下吐不出。（度盞）也是老和尚致得。（月藏）

佛祖膏肓の病を起し。衲僧必死の疾を活す。是れ砒礪にあらず。亦崖蜜に非ず。今日甚んに因つてか嚥不下吐不出ある。（盞を度して）也是れ老和尚に致し得たり。

其七　和尚

未動舌頭薦得。骨毛自生香氣。四處殺人活人。單用砒

礪一味。今日倒行此令去也。（度盞）某不妨嘗試。（古德）

未だ舌頭を動かさずして薦得す。骨毛自から香氣を生ず。四處の殺人活人。砒礪一味を單用す。今日倒に此の令を行じ去る。（盞を度して）某妨げず嘗試することを。

其八　和尚

蓬萊仙方。龍淵滴水。兩回點出爲人。直得江西鼎沸。

者箇是某殺人活命秘方。且道。即今如何受用。出乎爾返乎爾。（月藏）

蓬萊の仙方。龍淵の滴水。兩回點出して人の爲にす。直に得たり江西鼎沸することを。者箇は是れ某殺人活命の秘方。且らく道へ。即今如何んが受用せん。爾に出づるものは爾に返る。

其一　尊宿

拈來竺土大仙心。點出祖門殺活丸。未下口時高著眼。

當陽一味絕遮欄。伏以某。飲不入口吻。一味而不潤舌端。

換骨之方。醫王實除三毒。頤神之術。心王能治五官。

已吸盡洋洋西江水。還乾盡渺渺七里灘。奚論君子佐使。

寧拘溫凉熱寒。京師大黃甘所用。鎭州蘿蔔飽可餐。此

是某生前自受用三味。即今呈露一服。不從口入。舌頭

萬仞壁立全機何以觀。（拂一拂）處處怪來天地別。千叢

變作藥林巒。（虎云）

拈じ來たる竺土大仙の心。點出す祖門の殺活丸。未だ口を下さゞる時高く眼を著けよ。當陽の一味遮欄を絕す。伏して以れば某。飲んで口吻に入らず。味つて舌端を潤さず。換骨の方。醫王實に三毒を除く。頤神の術。心王能く五官を治む。故に洋洋

たる西江の水を吸盡し。環渺渺たる七里の灘を乾盡す。奚んぞ君子佐使を論ぜん。寧んぞ溫凉熱寒に拘らん。京師の大黃甘んじて用ゆる所。鎭州の蘿蔔飽まで餐すべし。此れは是れ某が生前の自受用三昧なり。即今一服を呈露す。口より入らず。舌頭萬仞壁立。全機何を以て觀ん。(拂一拂して)處處怪しみ來たる天地の別なるを。千叢變じて藥林巒と作る。

其二　尊宿

一草一葉。無非是藥。對面修合將來。切忌舌頭點著。點著後如何。鐵作肝腸。也須爛却。(西山)

一草一葉。是れ藥にあらざるなし。對面に修合し將ち來る。切に忌む舌頭に點著することを。點著して後如何ん。鐵作の肝腸。也須らく爛却すべし。

其一　禪師

法性湛然水合空。類無異色混相通。忽爲甘露親拈起。百味圓成一味中。恭以某。某子嫡子。洞山正宗。權着垢衣。始終不犯尊貴。却裝珍御。平生不露機鋒。正與麽時。木人半夜轉位。石女天明就功。忽如功位齊忘時。令無舌人如何喫却。剝地識情俱裂斷。鑊湯爐炭又淸風。(古德)

法性湛然水空に合す。類して異色なし混じて相通ず。忽ち甘露と爲して親しく拈起す。百味圓成す一味の中。恭しく以れば某。某子の嫡子。洞山の正宗。權に垢衣を着し。始終尊貴を犯さず。却つて珍御を裝ひ。平生機鋒を露はさず。正與麽の時。木人半夜位を轉じ。石女天明功に就く。忽ち功位齊しく忘ずる時の如

き。無舌人をして如何んか喫却せしめん。剝地識情倶に裂斷すれば。鑊湯爐炭又清風。

其二　禪師

甘草不ㇾ甜。黃連非ㇾ苦。換㆓人舌頭㆒。爛㆓人腸肚㆒。者裡是某禪師用過底方子。畢竟如何拈出。（度ㇾ盞）伏惟尙享。（南叟）

甘草甜からず。黃連苦からず。人の舌頭を換へ。人の腸肚を爛らす。者裡は是れ某禪師が用過する底の方子。畢竟如何んか拈出せん（盞を度して）伏して惟れは尙くは享けよ。

都寺

楊岐栗蓬。韶陽一曲。席上醍醐。盃中鴆毒。某還覺㆓毛寒骨辣㆒麽。（度ㇾ盞）莫ㇾ恠㆓輕觸㆒。（西山）

楊岐の栗蓬。韶陽の一曲。席上の醍醐。盃中の鴆毒。某還つて毛寒骨辣を覺ゆるや。（盞を度して）輕觸することを怪しむこと莫れ。

首座

一味單傳。天然迥別。根源不ㇾ在㆓蜀中㆒。現成豈假㆓修設㆒。從來劍掛㆓眉間㆒。覷著魂飛膽裂。（捧ㇾ盞）覿面相呈太直截。那更溪聲重漏泄。（石泉）

一味單傳。天然迥に別なり。根源蜀中にあらず。現成豈に修設を假らんや。從來劍眉間に掛く。覷著すれば魂飛び膽裂く。（盞を捧げて）覿面相呈して太だ直截。那んぞ更に溪聲重ねて漏泄せん。

地道收來。精麁揀擇。牛溲馬勃。蠱毒砒礵。盡情細抹將來。變作醍醐上味。當陽點出。滿座馨香。不比其佗薑杏湯。（無文）

地道收め來る。精麁揀擇。牛溲馬勃。蠱毒砒礵。情を盡し細末し將ち來り。變じて醍醐の上味と作す。當陽點出して。滿座馨香。其の佗の薑杏湯に比せず。

其一　上座

去聰黜明。苦口良藥。衲僧有病在膏肓。鎖斷咽喉吞不落。某。汝今藥病兩忘。一任呑却吐却。（天如）

聰を去り明を黜く。苦口の良藥。衲僧病膏肓にある有り。咽喉を鎖斷して呑めども落ちず。某。汝今藥病兩忘す。呑却し吐却するに一任す。

其二　上座

濃煎巴豆與砒礵。毒氣炎炎不可當。末後慇懃成鈍置。

一盃浮動百花香。（西山）

濃に巴豆と砒礵とを煎る。毒氣炎炎當るべからず。末後慇懃鈍置を成す。一盃浮動百花香し。

第三　奠茶香語

其一　和尚

朝日山中龍鳳團。長川亭下活波瀾。濃烹倒浸秋晏碧。孰若金莖沆瀣寒。恭惟某。靈苗骨髓。芳菲心肝。蓬蒿不犯。繁枝密葉珠貫。斧斤不及。盤根錯節龍蟠。爛漫桃李。難比歲遼芝蘭。聯芳接茂。江湖與二十四流競激湍。綴花結果。更星霜五百五十未凋殘。堪向紫羅帳裏仰讃。休在夜明簾外嗟歎。且道。即今應供底。如何辨來端。（一拂）兩腋清風拂淫雨。新晴灝氣滿林巒。

（玄樓）

朝日山中の龍鳳團。長川亭下の活波瀾。濃に烹倒に浸す秋晏の碧。金莖沆瀣の寒さに孰れぞ。恭しく惟れば。某大和尚禪師。靈苗の骨髓。芳菲の心肝。蓬蒿犯さず。繁枝密葉珠貫き。斧斤及ばず。盤根錯節龍蟠まる。爛漫桃李と同じからず。歲遼芝蘭に比すること難し。芳を聯ね茂を接し。江湖二十四流と激湍を競ひ。花を綴り果を結んで。星霜五百五十を更へて未だ凋殘せず。紫羅帳裏に向つて仰讃するに堪え。夜明簾外に在つて嗟歎することを休めよ。且らく道へ。即今應供底。如何んが來端を辨ぜん。（一拂して）兩腋の清風淫雨を拂ふ。新晴の灝氣林巒に滿つ。

其二　和尚

西蜀精英。東山苗裔。無陰陽地發生。別是一般風味。機先點出。十洲三島春回。末後烹來。四海五湖鼎沸。雖然如是。只今向什麽處與某相見。（良久）喫茶去。

（中洲）

西蜀の精英。東山の苗裔。無陰陽の地に發生す。別に是れ一般の風味。機先點出す。十洲三島春回り。末後烹來たる。四海五湖鼎沸す。然も是くの如くなりと雖も。只今什麼の處に向つて某と相見せん。（良久して）喫茶去。

其三　和尚

五承睿旨。八坐道場。大展三玄戈甲。豈止一旗一鎗。點出百草頭邊祖師意。與天下衲僧換骨洗腸。後學負此深冤。未審將何報償。不免汲澗水碾山石。春花磁黐雪乳還自嘗。老和尚。莫恠禮儀薄。淡中滋味長。（古雲）

五たび睿旨を承け。八たび道場に坐す。大いに三玄の戈甲を展ぶ。豈に一旗一鎗に止まらんや。百草頭邊の祖師意を點出す。天下の衲僧に與へて骨を換ひ腸を洗ふ。後學此の深冤を負ふ。未審何にを將てか報償せん。兔かれず澗水を汲んで山石を碾ることを。春花磁雪乳を黐へして還つて自から嘗む。老和尚。禮儀の薄さを恠しむこと莫れ。淡中滋味長し。

其四　和尚

不崩枝上。無底籃中。四經品題。五回點出。箇是人人知有底。只如春信未通。鎗旗未露底消息。又且作麼生。結舌有分。（絶岸）

不崩枝上。無底籃中。四たび品題を經。五たび點出す。箇は是れ人人有ることを知る底。只春信未だ通ぜず。鎗旗未だ露はれざる底の消息の如き。又且つ作麼生。舌を結ぶに分あり。

其五　和尚

一漚未發已前。百年頭邊消息。萬象森羅影現中。五湖四海無涓滴。點向某面前。恰似一文不直。鳳簫吹斷月爲霜。習習清風生兩腋。（淮海）

一漚未發已前。百年頭邊の消息。萬象森羅影中に現ず。五湖四海涓滴なし。某か面前に點向して。恰も一文に直せざるに似たり。鳳簫吹き斷えて月霜と爲り。習習たる清風兩腋に生ず。

其一　西堂

凌霄早春。蠱毒惡水。觀之則瞎。飲之則死。直饒趙州潙山。未必知這滋味。某。試嘗看。莫瞎睡。（梁山）

凌霄の早春。蠱毒の惡水。之を觀れば瞎し。之を飲めば死す。直饒趙州潙山も。未だ必ずしも這の滋味を知らず。某。試みに嘗め看よ。瞎睡すること莫れ。

其二　西堂

五龍滋味惡。殺活幾多人。鷲峰重點出。喚起舊精神。明明不在舌頭上。百草頭上轉不親。見得親。鼻孔依然搭上唇。（虎翁）

五龍滋味惡し。殺活す幾多の人。鷲峰重ねて點出して。喚起す舊精神。明明舌頭上にあらず。百草頭上轉た親しからず。見得て親しゝ。鼻孔依然上唇に搭く。

監寺

鎗旗未露。全殺全活。水乳和同。非甘非苦。某。點出了也。如何呑吐。者裡滋味不尋常。喫著教伊斷腸。（梁山）

鎗旗未だ露れず。全殺全活。水乳和同。甘にあらず苦にあらず。

某。點出了也。如何んが呑吐せん。者裡の滋味尋常にあらず。喫著すれば伊をして腸を斷たしむ。

知客

曾到未到喫茶。普請入門相見。雖然義出豐年。未免忒殺價賤。只如不作貴不作賤。作麽生商量。啞。盞子撲破成兩片。（南湖）

曾到未到喫茶。普請門に入つて相見す。然りと雖も義は豐年に出づ。未だ免かれず忒殺して價賤しきことを。只貴きことを作さず賤きことを作さゞるが如きんば。作麽生が商量せん。啞。盞子撲破して兩片と成る。

首座

文殊著賊試玻璃。無着失機八刻遲。驀解蠻身參此話。喫茶何必動唇皮。即今臨濟爺爺半杓。與末山孃孃半杓。等閑合來。成餞臨行一杓。某。若不會蠻身通氣。未免受文殊點檢。某甚無端。作麽是蠻身通氣一句。參。石女呑聲哭。金剛笑解頤。（洞水）

文殊賊を著けて玻璃を試む。無着機を失して八刻遲し。驀に蠻身を解して此の語に參ぜよ。喫茶何んぞ必ずしも唇皮を動かさん。即今臨濟爺爺の半杓と。末山孃孃の半杓と。等閑に合し來つて。臨行を餞するの一杓と成さん。某。若し蠻身の通氣を會せずんば。未だ文殊の點檢を受くることを免かれず。某。甚だ端しなし。作麽か是れ蠻身通氣の一句。參。石女聲を呑んで哭し。金剛笑つて頤を解く。

其一　上座

（擧盞）雲泛一甌。龍團嘘氣。風生兩腋。鷹爪得霜。

這箇某一生受用三昧。諸人還識麽。（置盞）偏正五位。

一旗二槍。（川僧）

（盞を擧して）雲一甌に泛び。龍團氣を嘘く。風兩腋に生じ。鷹爪霜を得。這箇は某が一生受用三昧。諸人還つて識るや。（盞を置き）偏正五位。一旗二槍。

其二　上座

一派溪流八十年。汲來汲去手親煎。深磨靈鑑知仙味。笑倒人間趙老禪。（獨園）

一派の溪流八十年。汲み來り汲み去つて手づから親から煎る。深く靈鑑を磨して仙味を知る。笑倒す人間の趙老禪。

第四　鎖龕香語

其一　和尚

全提妙密。獨奮空拳。掃蕩乃翁活計。布袋連底掀飜。者裡見得。不持寸鐵。坐斷重關。其忽未然。咫尺之間不觀師顏。（溪西）

全提妙密。獨り空拳を奮ひ。乃翁の活計を掃蕩し。布袋連底掀飜す。者裡見得せば。寸鐵を持せず。重關を坐斷す。其れ忽ち未だ然らずんば。咫尺の間師の顏を觀ず。

其二　和尚

妙得天台旨。盤珠影不留。死生聊一戲。定慧絕雙修。這裏說甚莊周夢蝶。蝶夢莊周。牢關俱鎖斷。雲散一天

秋。（希叟）

妙に天台の旨を得。盤珠影留まらず。死生聊か一戯。定慧雙修を絶ず。這裏甚の莊周蝶を夢み。蝶莊周を夢むとか說ん。牢關俱に鎖斷すれば。雲は散ず一天の秋。

其三　和尚

狂風一夜鼓波瀾。飜却吾家大法船。無角鐵牛沈巨海。空遺弓月照山川。某。高提祖印。五董名藍。聲動淸朝。晚膺詔旨。闡松源不傳之妙。增慧日無盡之輝。今朝結果收因。邃入無生三昧。直得雲愁霧慘。龍象咨嗟。正與麽時。內不放出。外不放入。又且如何話會。（以手鎖）無鬚鎖子鎖虛空。千古萬古提不動。（溪西）

狂風一夜波瀾を鼓し。飜却す吾家の大法船。無角の鐵牛巨海に沈み。空しく弓月を遺して山川を照らす。某。高く祖印を提さげて。五たび名藍を董す。聲淸朝を動かす。晚に詔旨に膺り。松源不傳の妙を闡き。慧日無盡の輝きを增す。今朝果を結び因を收め。邃く無生三昧に入る。直に得たり雲愁ひ霧慘み。龍象咨嗟することを。正與麽の時。內放出せず。外放入せず。又且つ如何んか話會せん。（手を以て鎖して）無鬚の鎖子虛空を鎖す。千古萬古提さぐれども動かず。

其四　和尚

聖箭子當レ機疾。生死關中。破レ塵破レ的。賞不レ樹功不レ立。鐵鎖高垂古殿寒。從教大地生荊棘。（佛光）

聖箭子機に當つて疾し。生死關中。塵を破し的を破す。賞を樹てず功を立てず。鐵鎖高く垂れて古殿寒し。從教大地荊棘を

生ずることを。

維那

末上一槌。七花八裂。佛祖迷レ蹤。乾坤失レ色。末後一句。太煞分明。藏レ身處須二沒蹤跡一。沒蹤跡處莫レ藏レ身。育王鎖子賣二與人一。（即庵）

末上の一槌。七花八裂。佛祖蹤に迷ひ。乾坤色を失ふ。末後の一句。太煞分明。身を藏す處須らく沒蹤跡なるべく。沒蹤跡の處身を藏すこと莫れ。育王の鎖子人に賣與す。

知庫

盡大地是箇庫藏。佛祖寧容二仰望一。放了又收。收了又放。昨朝放去不レ知レ蹤。直至二如今一收不レ上。收得上許二誰知一。無鬚鎖子兩頭垂。（虛堂）

盡大地是れ箇の庫藏。佛祖寧んぞ仰望を容れん。放了又收。收了又放。昨朝放去して蹤を知らず。直に如今に至つて收め上さず。收め得上して誰か知ることを計らん。無鬚の鎖子兩頭垂る。

殿主

即心是佛。沙裡無レ油。非心非佛。燈元是火。檢點將來。俱是死貨。若是伶利衲僧。背手掣開金殿鎖。（雪庭）

即心是佛。沙裡油なし。非心非佛。燈元是れ火。檢點し將ち來たれば。俱に是れ死貨。若し是れ伶利の衲僧ならば。背手にして掣開す金殿の鎖。

其一　書記

光境俱忘。凡聖路絕。照與二照者一。同時寂滅。便恁麼去。只得二一橛一。更須レ知レ有二上頭關一。把定放行爲レ汝決。某書記

還知麽。門背著レ環。鎖子添レ鐵。（南浦）

光境俱に忘じ。凡聖路絶ゆ。照と照者と。同時に寂滅す。便ち恁麽にし去り。只一橛を得たり。更に須らく上頭の關あるを知るべし。把住放行汝が爲に決す。某書記還つて知るや。門背環を著け。鎖子鐵を添ふ。

其二　書記

康廬風月。湖山烟雨。文彩未レ彰。面目全露。既是伶利衲僧。不レ妨東去。雖レ然。何似歸レ家掩レ關而住。（南叟）

康廬の風月。湖山の烟雨。文彩未だ彰はれず。面目全く露はる。既に是れ伶利の衲僧。妨げず東に去ることを。然りど雖も。何んぞ家に歸り關を掩ふて住するに似かん。

其一　上座

不レ慕二諸聖一。不レ重二己靈一。掀二飜華藏海一。推倒涅槃城一。雖レ然更須レ識二取這箇一。這箇是什麽。（石溪）

諸聖を慕はず。己靈を重んぜず。華藏海を掀飜し。涅槃城を推倒す。然りと雖も更に須らく這箇を識取すべし。這箇是れ什麽ぞ。瞥爾として情生ずれば。萬劫の羈鎖。

其二　上座

默時說。山色溪聲無二間歇一。說時默。雨急風號天地黑。語默不到處。脫體道應難。當レ機坐斷死生關。門掩二薰風一白晝閒。（石溪）

默の時說。山色溪聲間歇なし。說の時默。雨急風號天地黑し。語默不到の處。脫體に道ふことは應に難かるべし。機に當つて

坐斷す死生の關。門薫風を掩ふて白晝閉なり。

其三　上座

淺聞深悟。深聞不悟。睦州拶倒老雲門。笑倒嵩山破竈墮。不是心不是物。鈎鎖連環。刀挑不ㇾ出。（東山）

淺聞深悟。深聞不悟。睦州拶倒す老雲門。笑倒す嵩山の破竈墮。不是心不是物。鈎鎖連環。刀挑すれども出てず。

其四　上座

識㆓得自己㆒露堂堂。正眼看來非吉祥。某。石橋夢斷無㆓依倚㆒。金鎖玄關只這是。（東山）

自己を識得すれば露堂堂。正眼に看來れば吉祥にあらず。某。石橋夢斷えて依倚なし。金鎖玄關只這れ是れ。

其五　上座

光境俱忘。眼睛突出。四面無門。從者裡入。且道。入已還閉時如何。春雲鎖斷乾坤黑。無限輪槌擊不ㇾ開。（東山）

光境俱に忘じて。眼睛突出す。四面門なし。者裡より入る。且らく道へ。入り已つて還閉づる時如何ん。春雲鎖斷して乾坤黑し。限りなき輪槌擊てども開けず。

其六　上座

衲僧家須㆑具㆑眼。（擧㆑鎖）識㆓得這些㆒。參學事辨。何妨出㆑此㆒沒㆑彼。隨㆑時著衣喫飯。有㆓甚麼過患㆒。無爲無事人。猶有㆓金鎖難㆒。（退翁）

衲僧家須らく眼を具すべし。（鎖を擧して）這些を識得すれば。參學の事辨ず。何んぞ妨げん此れを出で彼に沒することを。時

に隨つて著衣喫飯す。甚んの過患があらん。無爲無事の人。猶金鎖の難あり。

其七　上座

達塗毒深恩。續圓照慧命。若非了事衲僧。爭得頭正尾正。跳出死生關。不住那伽定。（擊鎖）鎖斷要津行正令。（退翁）

塗毒の深恩に達し。圓照の慧命を續ぐ。若し了事の衲僧にあらずんば。爭てか頭正尾正なることを得ん。生死の關を跳出し。那伽定に住せず。（鎖を擊つて）要津を鎖斷して正令を行ず。

其八　上座

無位眞人。千化萬變。邂逅不相逢。相逢不相見。春風吹破碧桃枝。綠苔深鎖黃金殿。（佛光）

無位の眞人。千化萬變。邂逅相逢はず。相逢うて相見ず。春風吹き破る碧桃枝。綠苔深く鎖す黃金殿。

第五　起龕香語

其一　和尚

金烏玉兎兩輪彰。溪水潺潺夏日長。畢竟水還歸海納。
到頭雲自入山藏。老僧爲說無生法。扁鵲休誇益壽方。
惟有虛空最平等。世尊猶臥涅槃牀。事也不理。家也不
當。汝今恁麼。貶向蓮鄉。（奇然）

金烏玉兎兩輪彰なり。溪水潺潺夏日長し。畢竟水還た海に歸して納まり。到頭雲は自から山に入つて藏る。老僧爲に說く無生の法。扁鵲誇ることを休めよ益壽の方。惟虛空あつて最も平等。世尊猶臥す涅槃牀。事や不理。家や不當。汝今恁麼。蓮鄉に貶向す。

其二　和尚

咄咄咄休摸索。誰家深掩黃昏閣。子規夜半急相催。風
雨林中花已落。（顧視左右）還知道者落處麼。倒拈七尺
烏藤。直指伊歸極樂。（奇然）

咄咄咄摸索することを休めよ。誰家か深く黃昏の閣を掩ふ。子規夜半急に相催ほし。風雨林中花已に落つ。（左右を顧視して）還つて道者の落處を知るや。倒まに七尺の烏藤を拈じ。直に伊を指して極樂に歸せしむ。

其三　和尚

八角磨盤隨日轉。三脚驢兒逐電過。一生唱此無腔曲。
直至於今誰敢和。恭惟某。奪白馬令。續雲栖案。白雲
峰下。見鬼見神。苕溪岩畔。入泥入水。陶家輪撥轉向

上機關。破沙盆托出從前佛祖。平生好向放行中把住。直令窺伺無門。今日請向把住中放行。共喜追送有路。祇如放行一句。作麼生道。泥牛吼出江干道。踏破前山幾片雲。（永覺）

八角の磨盤日に隨つて轉じ。三脚の驢兒電を逐ふて過ぐ。一生此の無腔の曲を唱ふ。直に今に至つて誰か敢て和せん。恭しく惟れば某。白馬の令を奪ひ。雲栖の案を續ぐ。白雲峰下。鬼を見神を見。茗溪岩畔。泥に入り水に入る。陶家輪向上の機關を撥轉し。破沙盆從前の佛祖を托出す。平生好し放行の中に向つて把住し。直に窺伺するに門無からしむ。今日請ふ把住の中に向つて放行せよ。共に追送路あることを喜ぶ。祇放行の一句の如き。作麼生か道はん。泥牛吼え出だす江干の道。踏破す前山幾片の雲。

大海渺無際。漫天鼓黑風。悠悠烟渚客。到此盡迷蹤。

某。慣諳水脉。一生鼓棹揚帆。不犯波瀾。收盡錦鱗紅尾。掃去今時途轍。全提向上爪牙。功魁佛祖而不居。聲震雷霆而難掩。化緣既畢。一笑飜身。天無四壁地無門。畢竟眞歸何處去。東家作驢。西家作馬。要騎便騎。要下便下。負鞍銜鐵當生涯。佛手明明不可遮。（無準）

大海渺として際まりなし。漫天黑風を鼓す。悠悠烟渚の客。此に到つて盡く蹤に迷ふ。某。水脉を諳んずることに慣れ。一生棹を鼓し帆を揚げて。波瀾を犯さず。錦鱗紅尾を收盡し。今時の途轍を掃去し。向上の爪牙を全提す。功佛祖に魁して居らず。聲雷霆を震はして掩ひ難し。化緣既に畢り。一笑身を飜へす。

天に四壁なく地に門なし。畢竟眞歸何處に去る。東家驢と作り。西家馬と作る。騎らんと要せば便ち騎れ。下らんと要せば便ち下れ。鞍を負ひ鐵を銜んで生涯に當つ。佛手明明遮るべからず。

其五　和尚

一百光錢掛杖頭。前街後巷恣遨遊。今朝有酒今朝醉。明日無錢明日求。恭惟某。生緣東浙。祝髮西州。逆行順行。凡聖莫測。橫說竪說。聳動王侯。天魔爲伴侶。佛祖是寃讐。正好逢場作戲。俄然野壑歸舟。天堂收不得。地獄豈能留。又不能收。又不得留。必竟如何分別。咄。信脚出門行大道。不風流處也風流。（鐵牛）

一百の光錢杖頭に掛け。前街後巷恣に遨遊す。今朝酒あれば今朝醉ひ。明日錢なければ明日求む。恭しく惟れば某。生緣東浙。祝髮西州。逆行順行。凡聖測りなし。橫說竪說。王侯を聳動し。天魔を伴侶と爲す。佛祖是れ寃讐。正に好し場に逢ふて戲を作すことを。俄然野壑に舟を歸す。天堂收むることを得ず。地獄豈に能く留めんや。又收むること能はず。又留むることを得ず。必竟如何んが分別せん。咄。脚に任せて門を出れば大道あり。風流ならざる處也風流。

其六　和尚

（拍龕一下）會麼。不思善不思惡。於內無心。不道生不道死。於外何尋。已無內外。迥越古今。正與麼時。某如何起身去。閒事一朝都謝了。逍遙如月入西岑。（良高）（龕を拍つこと一下して）會すや。不思善不思惡。內に於て無

心。生とも道はず死とも道はず。外にして何んぞ尋ねん。已に内外なし。迥に古今を越ゆ。正與麼の時。某如何んか起身し去らん。閒事一朝都て謝し了る。逍遙として月の西岑に入るが如し。

西堂

颺下住山斧。來登喝石岩。岩中人不見。花雨尙毳毳。某。道重東西。學通内外。爛爛胸蟠風月。滔滔舌卷波瀾。三十年入泥入水。一切處透頂透底。不拘生死。不滯涅槃。上天堂入地獄。要行便行。東家驢西家馬。要住便住。箇是某尋常行履處。且如透出一路。推不前挽不後又作麽生。八角磨盤空裡走。（希叟）

住山の斧を颺下し。來つて喝石岩に登る。岩中人見えず。花雨尙毳毳。某。道東西に重く。學内外に通ず。爛爛たる胸は風月蟠り。滔滔たる舌は波瀾を卷く。三十年泥に入り水に入る。一切處頂に透り底に透る。生死に拘らず涅槃に滯らず。天堂に上ぼり地獄に入る。行んと要せば便ち行く。東家の驢西家の馬。住らんと欲せば便ち住まる。箇は是れ某が尋常行履の處。且ら く一路を透出して。推せども前まず挽けども後かざるが如きは又作麽生。八角の磨盤空裡に走る。

直歳

七十五年。如珠在淵。老而益壯。窮而益堅。輔弼山門。不憚入泥入水。作興梵刹。不辭運木運塼。歲晚投閒。一室翛然。迴絶躋攀。夜來忽逐春風去。遍界茫茫不知處。死生關破路頭通。烟際一聲啼杜宇。（斷溪）

七十五年。珠の淵にあるが如し。老いて益壯に。窮して益

堅し。山門を輔弼し。泥に入り水に入るを憚らず。梵刹を作興して。木を運び塼を運ぶことを辭せず。歲晚閒に投じて。一室翛然。迴に躋攀を絕す。夜來忽ち春風を逐ひ去る。遍界茫茫處を知らず。死生關破れて路頭通じ。烟際一聲杜宇啼く。

侍者

嗚呼。巾褪長辭聖制初。驚看灝氣犯清虛。青山面目古今在。一片微雲吹未降。恭以某。幻化空身。非生非滅。眞如淨界。無自無他。十年扣室參決。一旦借徑經過。雖欲忍死待汝再世。已奈皮帑添糟。不如只將一瓣兜樓。薰徹寂滅中本有鼻孔。（佛頂）

嗚呼。巾褪長に辭す聖制の初め。驚き看る灝氣清空を犯すを。青山面目古今あり。一片の微雲吹いて未だ除かず。恭しく以れば某。幻化の空身。生にあらず滅にあらず。眞如淨界。自なく他なし。十年室を扣いて參決し。一旦徑を借つて經過す。死を忍んで汝が再生を待たんと欲すと雖も。已に皮帑の槽を添ふことを奈かんせん。如かず只一瓣の兜樓を將つて。寂滅性中本有の鼻孔に薰徹せんには。

長老

曾自東方行脚還。萍蹤又寄日溪邊。生憎豎子俄爲祟。病入膏肓終不痊。即今向甚麼處安身立命。（撫棺）懷州牛矣益州馬。異類中行屋裡禪。因甚麼得與麼自在。步在脚下。（華頂）

曾て東方より行脚して還る。萍蹤又寄る日溪の邊。生憎豎子俄に祟を爲し。病膏肓に入つて終に痊えず。即今甚麼の處に向

つて安身立命せん。(棺を撫して)懷州の牛益州の馬。異類中行屋裡の禪。甚麼に因つてか與麼の自在を得ん。歩は脚下にあり。

其一　上座

(以レ杖畫一畫)只者一門。信爲二能入一。若能入得。丹霄獨立。新圓寂某。端的入得也否。若能入得。自知二出頭處一。作麼是出頭處。(以レ杖打擲)脫二下頂上笠一。(華頂)(杖を以て畫一畫して)只者の一門。信を能入と爲す。若し能く入得せば。丹霄に獨立す。新圓寂某。端的入得すや否や。若し能く入得せば。自から出頭の處を知らん。作麼か是れ出頭の處。(杖を以て打擲して)頂上の笠を脫下せよ。

其二　上座

混沌未分。凝然獨露。一屬二生死一。不レ墮二染汚一。直得二純淸純點一。猶是眞常流注。且道。向上事如何。(撫レ龕)箇裡見得分明。便請丹霄獨歩。(靈舟)

混沌未分。凝然獨露。一に生死に屬す。染汚に墮せず。直に純清絶點なることを得るも。猶是れ眞常流注。且らく道へ。向上の事如何ん。(龕を撫して)個裡見得分明。便ち請ふ丹霄獨歩。

其三　上座

淨潔無痕。更加二磨鍊一。直須レ照二破娘生面一。(撫レ龕)打二破鏡一來。與レ汝相見。鑑覺雙忘死眼開。脚跟拽斷紅絲線。(希叟)

淨潔痕なし。更に磨鍊を加ふ。直に須らく娘生の面を照破すべし。(龕を撫して)鏡を打破し來れ。汝と相見せん。鑑覺雙忘死眼開き。脚跟拽斷す紅絲の線。

其四　上座

大海乾枯。虚空迸裂。假饒恁麼。只得一槾。而今飜轉面皮。依然弄峨眉月。某。瞥不瞥。無限清風動寥廓。（古德）

大海乾枯し。虚空迸裂す。假饒恁麼なるも。只一槾を得たり。而今面皮を飜轉して。依然として峨眉の月を弄す。某。瞥不瞥。限りなき清風寥廓を動かす。

其五　上座

大洋海底火燒天。救得眉毛沒腦門。冷地忽然飜得轉。何曾動着一毫端。擘之不破。揑不成團。芳草渡頭漸運歩。等閑身在杏花村。（晦堂）

大洋海底火天を燒く。眉毛を救ひ得て腦門を沒す。冷地忽然飜つて轉ずることを得るも。何んぞ曾て動着せん一毫端。之れを擘けども破れず。揑むれども團を成さず。芳草渡頭漸く歩を運べば。等閑に身は杏花の村にあり。

其六　上座

靜處閒浩浩。鬧處靜悄悄。一處不相當。兩頭俱失照。作麼生。東海正潮生。人在長安道。（佛光）

靜處閒浩浩。鬧處靜悄悄。一處相當らず。兩頭俱に失照す。作麼生。東海正に潮生ず。人は長安の道にあり。

法公

秋風惡。秋風惡。吹落紛紛丹桂蘂。滿庭荒草沒人鋤。一點清香誰嗅著。正恁麼時。嗅却即死去。去當自知。吾無隱乎爾。（無準）

秋風惡し。秋風惡し。吹き落す紛紛たる丹桂の蘂。滿庭の荒草人の鋤く沒し。一點の清香誰か嗅著せん。正恁麼の時。嗅却すれば即ち死去す。去つて當に自知すべし。吾爾に隱すことなし。

第六　掛眞乃至入祖堂香語

其一　掛眞（和尙）

古佛心宗。衲僧命脉。赤手全提。是甚標格。（展開眞）

本來面目露堂堂。千古萬古有誰識。（東山）

古佛の心宗。衲僧の命脉。赤手に全提す。是れ甚麼の標格ぞ。（眞を展開して）本來の面目露堂堂。千古萬古誰有てか識らん。

其二　掛眞（和尙）

大用現前。不存軌則。拶透虛空。乾坤失色。東家作驢。西家作馬。不是河南。便是河北。知得落處。許爾親見某和尙。稍涉遲疑。（展開）面目分明。易見難識。（即菴）

大用現前。軌則を存せず。虛空に拶透して。乾坤色を失す。東

家に驢と作り。西家に馬と作る。是れ河南にあらずんば。便ち是れ河北。落處を知得すれば。爾に許す親しく某和尚に見ゆることを。稍遲疑に涉らば（展開して）面目分明。見易うして識り難からん。

其三　掛眞（和尚）

（至二眞前一提二起坐具一）大衆會麽。（遂指レ眞）我昔日行脚時。被者老和尚將二一百二十斤擔子一。放在我身上。如今且得二天下太平一。（却顧二視大衆一）會麽。（衆無語。師槌レ胸）嗚呼哀哉。伏惟尚饗。（楊岐）

（眞前に至り坐具を提起して）大衆會すや。（遂に眞を指して）我れ昔日行脚の時。者の老和尚に一百二十斤の擔子を將て我が身上に放在せらる。如今且らく天下太平を得たり。（却つて大衆を顧視して）會すや。（衆無語。師胸を槌て）嗚呼哀しい哉。伏して惟みれば尚くは饗けよ。

其四　掛眞（和尚）

虛空無相。不レ拒二諸相發揮一。寶鏡無形。豈碍二群形頓現一。相與レ形而常僞。空與レ鏡而常眞。故即僞即眞。不生不滅。大衆。或若二虛空頓消殞一。寶鏡不レ臨レ臺。光境俱忘。復是何物。六十三年即且置。且道即今某老子在二什麽處一。（提二起眞一）生涯何所レ有。古今與レ人看。（佛眼）

虛空無相。諸相の發揮することを拒まず。寶鏡無形。豈に群形の頓に現することを碍へんや。相と形と常に僞。空と鏡と常に眞。故に即僞即眞。不生不滅。大衆。或は虛空頓に消殞するが若くんば。寶鏡臺に臨まず。光鏡俱に忘ず。復是れ何物ぞ。六十三

年は即ち且らく置く。且らく道へ。即今某老子什麼の處にか在る。
（眞を提起して）生涯何んの有る所ぞ。古今人に與へて看せしむ。

其五　掛眞（和尚）

挂角羚羊善躲身。直教千聖總難尋。今朝落在山僧手。
不免掀開示個人。（永覺）

塵。（雲）雙瞳炯炯如秋日。炤破山河沒點

角を挂ぐる羚羊善く身を躲け。直に千聖をして總て尋ね難からしむ。今朝山僧が手に落在す。掀開して個の人に示すことを免かれず。雲。雙瞳炯炯秋日の如く。山河を炤破して點塵なし。

入龕（和尚）

輪王三寸鐵。遍界是刀鎗。山河倒走。日月奔忙。五處全提。機先難構。坐斷生死牢關。看取推門入曰。

（希叟）

輪王三寸の鐵。遍界是れ刀鎗。山河倒しまに走り。日月奔ること忙がはし。五處全提。機先構し難し。生死の牢關を坐斷す。門を推して曰に入ることを看取せよ。

函蓋（上座）

一念心清淨。則生死永絶。隨波逐浪句。截斷衆流句。
函蓋乾坤句。總不勞拈出。（南石）

一念心清淨なれば。即ち生死永く絶ゆ。隨波逐浪の句。截斷衆流の句。函蓋乾坤の句。總て拈出することを勞せず。

其一　移龕（和尚）

象川朶雲。叢林有聲。秘魔叉下。道出常情。三度住山。
鄞水吳江皆鼎沸。兩回分座。南屏玉几益崢嶸。回機轉

位。踢倒化城。行看東山西嶺青。（古德）

象川朶雲。叢林聲あり。秘魔叉下。道常情を出づ。三度住山して。鄞水吳江皆鼎沸し。兩回分座して。南屏玉几益峥嶸。機を回らし位を轉じて。化城を踢倒す。行くゆく東山西嶺の青きを看る。

其二　移龕（西堂）

五龍雲深。東溪水惡。流到冷泉。有出身著。一滴元無。千波競作。作無作。四海浪平。百川潮落。（無準）

五龍雲深し。東溪水惡し。流れて冷泉に到りて。出身の著あり。一滴元無。千波競え作る。作無作。四海浪平に。百川潮落つ。

其一　舉哀（和尚）

空索索來。逼塞虛空撥不開。赤條條去。積岳堆山無著處。便恁麼。猶是最初機。未是末後句。諸人要知某末後句麼。蒼天蒼天。寃苦寃苦。（石溪）

空索索來。虛空に逼塞して撥けども開けず。赤條條去。積岳堆山著する處なし。便ち恁麼。猶是れ最初の機。未だ是れ末後の句にあらず。諸人某が末後の句を知らんことを要すや。蒼天蒼天。寃苦寃苦。

其二　舉哀（和尚）

來無所從。百川曲折盡朝東。去無所至。蝴蝶夢中家萬里。幻泡忽滅。金剛腦後抽生鐵。清風未已。鷓鴣啼在深花裡。某。無端閉目。昨夜帶累。南山用刀剜空。諸人若也不會。只得換手槌胸。（石田）

來るに所從なし。百川曲折盡く東に朝す。去るに所至なし。

蝴蝶夢中家萬里。幻泡忽ち滅す。金剛腦後生鐵を抽んず。清風未だ已まず。鷓鴣啼きて深花裡にあり。某。端なく目を閉づ。昨夜帶累。南山刀を用ゐて空を剜る。諸人若し會せずんば。只得たり手を換へて胸を槌つことを。

提衣（和尚）

鷄足山前。黃梅半夜。接響承虛。囊藏被蓋。諸人要見某一生受用不盡。末後慇懃底（提衣）非新非故。非短非長。一鍼鋒具無量妙義。一絲頭具無邊世界。而今普示諸人。也要大家酬價。雖然其道。不作貴不作賤。畢竟如何商量。喝。（清虛）

鷄足山前。黃梅半夜。響に接して虛を承く。囊藏被蓋。諸人某が一生受用不盡にして。末後慇懃底を見んと要すや。（衣を提げて）新にあらず故にあらず。短にあらず長にあらず。一鍼鋒に無量の妙義を具し。一絲頭に無邊の世界を具す。而今普く諸人に示す。也大家の價に酬いんことを要す。然りと雖も且らく。貴と作さず賤と作さず。畢竟如何んが商量せん。喝。

安骨（和尚）

化緣七十年玆滿。長用頤神換骨方。撒手春霄那畔去。落花流水太茫茫。恭惟新般涅槃某。曹源正脉。少室聯芳。久嘯禪洞雲。巧奏新豐曲子。再吟諸嶽月。重增如意寶光。訪知識於江浙。錄僧徒於備陽。泳游覺海波瀾。深探宗要。開闢蓮華精舍。遠洩德香。清白家風凛凛。娘生面目堂堂。此是和尚平生德用也。只如末後安身處。作麽生敷揚。壺中天地古今穩。劫外乾坤日月長。（良高）

化緣七十年茲に滿つ。長に用ゆ頤神換骨の方。手を春霄に撒して那畔に去る。落花流水太だ茫茫。恭しく惟れば新般涅槃某。曹源の正脉。少室の聯芳。久しく禪洞の雲に嘯き。巧に新豐の曲子を奏す。再たび諸嶽の月に吟し。重ねて如意寶光を增す。知識を江浙に訪ひ。僧徒を備陽に錄す。覺海の波瀾に泳游し。深く宗要を探り。蓮華精舍を開闢し。遠く德香を洩らし。淸白の家風凛凛。娘生の面目堂堂。此れは是れ和尙が平常の德用なり。只末後安身の處の如き作麽生が敷揚せん。壺中の天地古今穩に。劫外の乾坤日月長し。

其一　起骨（都寺）

涅槃心眞如性。猶是眞淨流注。透金圈呑栗棘。未出生死岐路。大火聚裡飜身。直得皮穿骨露。（托起骨）某。會麽。既來多子塔前。更須進者一步。（別源）

涅槃心眞如性。猶是れ直淨流注。金圈を透り栗棘を呑む。未だ生死の岐路を出てず。大火聚裡身を飜へす。直に得たり皮穿ち骨露るゝことを。（骨を托起して）某會すや。既に多子塔前に來つて。更に須らく者の一步を進むべし。

其二　起骨（禪師）

黃梅遲暮緩定規。七百嬰孩爭競衣。嚴令司農倒用印。直傳磨衲入宮闈。某禪師是則是。還有尋聲逐響麽。（撫骨）蹤跡遂無人識得。從來仙骨解能飛。（虎關）

黃梅遲暮家規緩なり。七百の嬰孩爭ふて衣を競ふ。嚴令司農倒しまに印を用ゆ。直に磨衲を傳へて宮闈に入る。某禪師是は則ち是。還つて聲を尋ね響を逐ふ有りや。（骨を撫して）蹤跡遂に

人の識り得るなし。從來仙骨能く飛ぶことを解す。

其三　起骨（監寺）

楊岐鬼眼睛。臨濟的骨髓。雙暗復雙明。總是總不是。硬似鐵軟如泥。拈得便行千萬里。百花深處鷓鴣啼。（靈叟）

楊岐の鬼眼睛。臨濟の的骨髓。雙暗復雙明。總て是總て不是。硬きこと鐵に似軟かなること泥の如し。拈得して便ち行く千萬里。百花深き處鷓鴣啼く。

其四　起骨（上座）

祖師心印。狀似鐵牛之機。一鎚粉碎。直得火迸星飛。正恁麼時。去則是住則是。擬議白雲萬里。（南叟）

祖師の心印。狀鐵牛の機に似たり。一鎚に粉碎す。直に得たり火迸り星飛ぶことを。正恁麼の時。去則ち是か住則ち是か。擬疑すれば白雲萬里。

其五　起骨（上座）

萬里南來。單傳直指。（撫骨）這裡透得便行。覓甚老胡骨髓。便恁麼去絕商量。日輪依舊扶桑起。（元庵）

萬里南來。單傳直指。（骨を撫して）這裡透得して便ち行く。甚んの老胡が骨髓を覓めん。便ち恁麼にし去つて商量を絕す。日輪舊に依つて扶桑より起る。

其六　起骨（首座）

人天眼目。佛祖骨髓。昨日晴今日雨。浙東山浙西水。莫只者便是麼。劍去久矣。（南叟）

人天の眼目。佛祖の骨髓。昨日は晴今日は雨。浙東は山浙西は

水。たゝ者れ便ち是なること莫しや。劍去つて久し。

其七　起骨（庵主）

居而安。逸而樂。遊戲生死。無羈無束。有時大宅棲身。有時孤峯獨宿。如今收捨歸去來。徹骨瑩如氷玉。揑不團擘不開。東山西嶺添新綠。（斷溪）

居して安く。逸して樂しむ。生死に遊戲し。羈なく束なし。時あつて大宅に身を棲ましめ。時あつて孤峯獨り宿す。如今收捨歸去來。徹骨瑩として氷玉の如し。揑して團まらず擘れども開かず。東山西嶺新綠を添ふ。

其一　入骨（和尚）

從來玉骨是冰肌。髣髴前村雪裏枝。寶杖頻挑挑不起。遂無落處與人知。某。迅機電卷。妙用星馳。放行也雲行雨施。把住也驅耕奪飢。養痾掩一庵。只得一二日。敷化董三刹。已邁三十朞。步驟可見。進退適宜。正與麽時。末後一句。作麽生保任。（撫骨）那伽定中無恙不。問訊師兄黃面皮。（虎關）

從來玉骨是れ冰肌。髣髴たり前村雪裏の枝。寶杖頻に挑ぐれども挑げ起さず。遂に落處の人に與へて知らしむるなし。某。迅機電卷き。妙用星馳す。放行するや雲行き雨施し。把住するや耕を驅り飢を奪ふ。痾を養ふて一庵を掩ひ。只二三日を得たり。化を敷きて三刹を董し。已に三十朞を邁ふ。步驟見るべく。進退宜しきに適す。正與麽の時。末後の一句。作麽生か保任せん。（骨を撫して）那伽定中恙なきや不や。問訊す師兄が黃面皮。

其二　入骨（上座）

香煙起處。便與麽去。大地冰稜合。千山飛雪絮。便與麽去。大無本據。（撫骨）蒼龍蛻骨時。不在澄潭裏。（一山）

香煙起る處。便ち與麽にし去る。大地冰稜合し。千山雪絮飛ぶ。便ち與麽にし去る。太だ本據なし。（骨を撫し）蒼龍蛻骨の時。澄潭の裏にあらず。

其三　入骨（上座）

雲聳北岑。煙横南渡。全彰自己家風。覿面了無回互。且道。這一揑子。畢竟如何。妙在轉處。（古德）

雲北岑に聳え。煙南渡に横ふ。全く自己の家風を彰はし。覿面了に回互なし。且らく道へ。這の一揑子。畢竟如何。妙は轉處にあり。

其四　入骨（上座）

皮膚脱落一眞實。雲散秋空月獨圓。二十餘年槐下夢。覺來鼻孔正遼天。雖然與麽。葉落歸根一句。作麽生道。湘南潭北黄金骨。無影樹林光燦然。（良高）

皮骨脱落一眞實。雲散じて秋空月獨り圓なり。二十餘年槐下の夢。覺め來つて鼻孔正に遼天。然も與麽なりと雖も。葉落ち根に歸するの一句。作麽生か道はん。湘南潭北黄金の骨。無影樹林光り燦然。

其五　入骨（庵主）

透生死關。出有無見。打破虛空。何處履踐。冷灰堆裡。露影藏身。無縫塔中。萬化千變。也是秦時輾轢鑛。（大川）

生死の關を透り。有無の見を出て。虛空を打破し。何處にか履踐せん。冷灰堆裡。影を露はし身を藏す。無縫塔中。萬化千變。也是れ秦時の轘轢鑽。

其六　入骨（上座）

鐵圍城。大火燄。百匝千重。四方八面。直饒轉得身來。又是坑塹。知不知見不見。古墓深深埋暗箭。（西岩）

鐵圍城。大火燄。百匝千重。四方八面。直饒身を轉得し來るも。又是れ坑塹。知不知見不見。古墓深深暗箭を埋む。

其七　入骨（庵主）

金剛正體絕烟塵。火裏分明面目眞。端的掃除冷灰見。骨頭節節是全身。某。智者樂智。仁者樂仁。切通圓家。如周公勞吐握。禮及晝夜。似仲尼分君臣。政行施以道。至德必有隣。數萬兵伏胸中。決千里計。三尺劍歸掌內。致太平民。其活機也。象王回顧。其意氣也。獅子嚬呻。百年生死一浮漚。不通凡聖。北邙風月山路露。把定要津。出離現在果。撥轉正法輪。正與麽時。山僧拄杖子口吧吧地道。即今別有舍利。爲庵主指陳去。金爐放出紅麒麟。（江心）

金剛の正體烟塵を絕す。火裏分明に面目眞なり。端的掃除して冷灰見ゆ。骨頭節節是れ全身。某靈位。智者は智を樂み。仁者は仁を樂む。功圓家に通ず。周公の吐握に勞するが如く。禮晝夜に及ぶ。仲尼の君臣を分つに似たり。政行施すに道を以てし。至德必ず鄰あり。數萬の兵胸中に伏し。千里の計を決し。三尺の劍掌內に歸し。太平の民を致す。其の活機や。象王回顧し。

其の意氣や。獅子嚬呻す。百年の生死一浮漚。凡聖に通ぜず。北邙の風月山路露る。要津を把定す。現在の果を出離し。正法輪を撥轉す。正與麽の時。山僧の拄杖子。口吧々地に道ふ。即今別に舍利あり。庵主の爲に指陳し去らん。金爐放出す紅麒麟。

燬骨（淨人）

一大藏教。全體是火。若有嶺南骨。便好赤身擔前。雖然。更入紅爐重煆過。（高峰）

一大藏教。全體是れ火。若し嶺南の骨あらば。便ち好し赤身にして擔ひ前まん。然りと雖も。更に紅爐に入つて重ねて煆過す。

其一　轉骨（書記）

白珪之玷。文不加點。髑髏雙眼開。物物皆成現。如何見得。眉從眼合。步隨脚轉。（古德）

白珪の玷。文點を加へず。髑髏雙眼開く。物物皆成現。如何が見得せん。眉は眼より合し。步は脚に隨つて轉ず。

其二　轉骨（上座）

窮萬法根源。徹千聖骨髓。檢點將來。猶是鬼家活計。（撫骨）者裡轉得身吐得氣。雲門睦州在爾脚底。（古德）

萬法の根源を窮め。千聖の骨髓に徹す。檢點し將ち來る。猶是れ鬼家の活計。（骨を撫して）者裡身を轉得し氣を吐得すれば。雲門睦州爾が脚底にあり。

其一　撒骨（上座）

颺下娘生袴。投身大火聚裡。飜身失却最初步。正恁麽時如何。鴈影落寒潭。孤舟橫野渡。（破庵）

娘生の袴を颺下し。身を大火聚裡に投ず。身を飜へして失却す

最初の歩。正恁麼の時如何ん。鴈影寒潭に落ち。孤舟野渡に横ふ。

其二　撒骨（和尚）

如何是佛。新婦騎レ驢阿姑牽。如何是佛。三脚驢子弄レ蹄行。撞破生死牢關。踏著通天活路。地歸レ地。水歸レ水。火歸レ火。風歸レ風。横身三界外。何處覓行蹤。（月江）

如何なるか是れ佛。新婦驢に騎り阿姑牽く。如何なるか是れ佛。三脚の驢子蹄を弄して行く。生死の牢關を撞破し。通天の活路を踏著す。地地に歸し。水水に歸し。火火に歸し。風風に歸す。身を三界の外に横ふ。何處にか行蹤を覓めん。

其三　撒骨

廓然大道沒方所。南北東西何處求。直下無心超法界。脚頭無處不優遊。某。會麼。隨レ流認得性。無喜亦無憂。（鐵牛）

廓然として大道方所を沒す。南北東西何處にか求めん。直下無心法界を超ゆ。脚頭處として優遊ならざるなし。某。會すや。流に隨つて性を認得すれば。喜もなく亦憂もなし。

撒灰（侍者）

灰飛烟滅不レ知方。忍レ對滄洲白鳥鄉。五濁海昏怒濤惡。好於波嶮作津梁。某。是則是。只如沒蹤跡處莫レ藏身。藏身處沒蹤跡上又且作麼生。水面風生雲翳散。日輪冷照午時光。（虎關）

灰飛び烟滅して方を知らず。滄洲白鳥の鄉に對するに忍びんや。五濁海昏うして怒濤惡し。好し波嶮に於て津梁と作らん。某。

是は則ち是。只沒蹤跡の處に身を藏する莫く。身を藏する處に蹤跡を沒するが如き。又且作麼生。水面風生じて雲翳散じ。日輪冷に照らす午時の光。

入壙（講主）

涅槃後有二大人相一。盡十方空藏不レ得。一片閒雲卷復舒。千峰萬峰凛二寒色一。便與麼去時如何。土曠人稀相逢者少。（大川）

涅槃後大人の相あり。盡十方空藏すること得ず。一片の閒雲卷復舒。千峰萬峰寒色凛たり。便ち與麼にし去る時如何ん。土曠く人稀にして相逢ふ者少なり。

其一　入塔（禪師）

出沒隨緣即是宗。大人到處有二靈蹤一。良哉徧界無私句。萬象森羅不レ患レ聾。伏惟某禪師。智超二物外一。妙契二環中一。大用難レ量。橫該竪抹。峻機圓轉。八脫七通。未二示寂一前。處處露二靈骨一。已歸眞後。塵塵現二眞容一。隱顯無二空手一。說默藏二利鋒一。好是一著子。化權莫レ有レ窮。諸仁者還見先師眞相麼。（合掌低頭）今日豁開無縫塔。未來塵劫扇二門風一。（夢窻）

出沒隨緣即ち是れ宗。大人到處靈蹤あり。良い哉徧界無私の句。萬象森羅聾を患へず。伏して惟れば某禪師。智物外に超え。妙環中に契ふ。大用量り難く。橫該竪抹。峻機圓轉。八脫七通。未だ示寂せざる前。處處靈骨を露はし。已に歸眞の後。塵塵眞容を現ず。隱顯空手なく。說默利鋒を藏す。好し是の一著子。化權窮りあるなし。諸仁者還つて先師の眞相を見るや。（合掌低

頭して）今日豁開す無縫の塔。未來塵劫門風を扇ぐ。

其二　入塔（和尚）

千聖頂顎骨骨別。當陽突出好生觀。大士峯前全體現。層層落落影團團。正與麽時。莫是某和尚還家穩坐底消息麽。依稀華藏甚深海。髣髴妙高不動山。（寂室）

千聖の頂顎骨骨別なり。當陽突出す好生觀。大士峯前全體現ず。層層落落影團團。正與麽の時。是れ某和尚か還家穩坐底の消息なることなしや。依稀たり華藏甚深海。髣髴たり妙高不動の山。

其三　入塔（和尚）塔曰寶月

生平孤硬守高風。一種森嚴鐵石胸。五處化緣今已畢。翻身撞倒太虛空。某。西來大覺嫡孫。正傳普覺眞子。

調古神閒。氷清檗苦。松島山中優曇始現。稻荷峰頂紅日卓午。飽聽松林十里漲海寒濤。把定第五橋頭長安大路。迨乎巨嶠峻登。克踵祖父前武。還鄉一曲賦歸歟。八臂那吒欄不住。去來如幻。生死如電。陋巷不騎金色馬。去來生死。打成一片。廻途却著舊爛衫。骨頭節節是金珠。如淨瑠璃含寶月。正與麽時。湘之南潭之北。一新塔樣。別是乾坤恩怨難分。子歸就父一句。作麽生道。萬古神光無晝夜。長松幽谷白雲深。（清拙）

生平孤硬高風を守る。一種森嚴鐵石の胸。五處の化緣今已に畢る。翻身撞倒す太虛空。某。西天大覺の嫡孫。正傳普覺の眞子。調古神閒。氷清檗苦。松島山中優曇始めて現じ。稻荷峰頂紅日卓午。飽くまで松林十里漲海の寒濤を聽き。第五橋頭長安の大

路を把定す。巨嶠を峻登するに迨び。克く祖父の前武を踵ぎ。還郷の一曲歸歟を賦す。八臂の那吒欄れども住まらず。去來幻の如く。生死電の如し。陋巷には騎せず金色の馬。去來生死。打成一片。廻途却つて著く舊爛衫。骨頭節節是れ金珠。淨瑠璃に寶月を含むが如し。正與麽の時。湘の南潭の北。塔樣を一新す。別に是れ乾坤。恩怨分ち難し。子歸つて父に就くの一句。作麽生か道はん。萬古の神光晝夜なし。長松幽谷白雲深し。

其四　入塔（和尚）

摩醯三眼。洞徹無レ私。末後全提。今之是也。某。平生擔板不レ受二差排一。會二盡物我一如一。透二過生死窠臼一。履二刀山劍樹一。如レ步二紅蓮一。入二鑊湯爐炭一。似レ登二寶所一。全體是個大解脫門。更無二一絲毫許外物一。化緣既畢。借レ路經過。火光三昧自焚レ軀。烈焰亘レ天誰著レ眼。黃金靈骨。五色燦然。不レ昧二高蹤一。斬新光彩。今日安二藏窣堵一。坐二斷溪山一。萬木生レ風。千江照レ月。眞燈烈燄。少室增レ輝。正恁麽時。且移レ身換レ步一句。作麽生道。還知落處麽。寶印當レ空妙。重重錦縫開。喝。（應庵）

摩醯の三眼。洞徹私なし。末後の全提。今之れ是なり。某。平生擔板差排を受けず。物我一如なることを會し盡して。生死の窠臼を透過し。刀山劍樹を履むこと。紅蓮を步むが如く。鑊湯爐炭に入ること。寶所に登るに似たり。全體是れ個の大解脫門。更に一絲毫許りの外物なし。化緣既に畢つて。路を借つて經過す。火光三昧自ら軀を焚く。烈焰天に亘る誰が眼を著けん。黃金の靈骨。五色燦然。不昧の高蹤。斬新の光彩。今日窣堵に

安藏し。溪山を坐斷す。萬木風を生じ。千江月を照す。眞燈烈
燄。少室輝を增す。正恁麼の時。且らく身を移し步を換ふの
一句。作麼生か道はん。還つて落處を知るや。寶印空に當つて
妙。重重錦縫開く。喝。

其五　入塔（和尙）

佛燈滅却瞎驢邊。知是無明得的傳。慚愧頂門正法眼。
空餘夜月照青天。恭惟某。誤入長勝籌室。喫著痛拳。
從此喪命根。露些風骨。出言吐氣處。越格超宗。揚眉
瞬目時。截釘斬鐵。南詢歷盡二十年。勘過諸方老古錐。
便見大唐國裡。只是有禪無師。還向巨福山中。平分風
月。宏開萬壽爐韝。鍛鍊聖凡。橫拈倒用。星飛電卷。
眞操實行。冰潔霜嚴。太古正音和者寡。調轉無生七見。
春。末後一句。淵默雷轟。直至如今。疑殺幾人。一義
同心。山欠高兮海欠深。兄弟十字。無限淸風來未已。
者箇是某平生受用不盡底三昧。卽今却要知眞歸處麼。
未免重通箇消息去。流水潺潺一谿曲。白雲長鎖碧層巒。
湘南潭北黃金國。不似自家田地閒。（寂室）

佛燈滅却す瞎驢邊。知んぬ是れ無明的傳を得たることを。慚愧
す頂門の正法眼。空しく夜月を餘して靑天を照らす。恭しく惟
れば某。誤つて長勝の籌室に入り。痛拳を喫著し。此れより命
根を喪す。些の風骨を露はし。言を出だし氣を吐く處。格を越
え宗を超ふ。眉を揚げ目を瞬く時。釘を截り鐵を斬る。南詢
歷盡す二十年。勘過す諸方の老古錐。便ち見る大唐國裡。只是
れ禪あつて師なきことを。還巨福山中に向つて。風月を平分し。

宏く萬壽の爐韜を開いて。聖凡を鍛錬す。横拈倒用。星飛び電卷く。眞操實行冰潔霜嚴。太古の正音和する者寡し。調無生に轉じて七たび春を見る。末後の一句。淵默電轟。直に如今に至つて。幾人をか疑殺す。一義同心。山高きことを欠き海深きことを欠く。兄弟十字。限りなき清風來つて未だ已まず。者箇は是れ某が平常受用不盡底の三昧なり。即今却つて眞の歸處を知らんと要すや。未だ免かれず重ねて箇の消息を通じ去ることを。流水潺潺たり一谿曲。白雲長へに鎖す碧層巒。湘南潭北黄金の國。自家田地の閒なるに似ず。

其六　入塔（和尚）

六坐名藍寵命新。金襴日色照楓宸。巨鼇夜負神山去。遍界難藏尊特身。某。氣呑佛祖。道契王臣。分杉谷一枝之清蔭。增玉山萬古之精神。激奔曹源一滴。便見滔天沃日。唱起雲門古曲。爭聽白雪陽春。爐韜處以天地爲橐籥。鉗鎚下驅造化入陶鈞。猊絃彈兮衆音息。天飄霑兮一雨均。是故。遊夫彀中者。悉是九苞瑞鳳。無非五色祥麟。千百萬衆。度人已畢。七十一年。瘞履時臻。咸謂此界戢化儀。孰知他方轉法輪。大寂定門。塵塵入正受。法界海會。物物顯全眞。正與麽時。眞慈不起寂滅場。坐斷報化佛頭底句。且如何指陳。靈蹤元在白雲頂。問訊山中舊主人。（絕海）

六たび名藍に坐して寵命新なり。金襴日色楓宸を照らす。巨鼇夜神仙を負ひ去り。遍界藏し難し尊特の身。某。氣佛祖を呑み。道王臣に契ふ。杉谷一枝の清陰を分ち。玉山萬古の精神を增す。

曹源の一滴を激奔し。便ち見る天に滔し日に沃することを。雲門の古曲を唱ひ起し。爭ふて白雪陽春を聽く。爐韝處天地を以て橐籥と爲し。鉗鎚下造化を驅つて陶鈞に入る。貌絃彈じて衆音息み。天飄霑ふて一雨均し。是の故に。夫の彀中に遊ぶ者悉く是れ九苞の瑞鳳。五色の祥麟にあらざるなし。千百萬衆。度人已に畢り。七十一年。瘞履時臻る。咸謂へらく此界化儀を戢むと。孰か知らん他方法輪を轉ずることを。大寂定門。塵塵正受に入る。法界海會。物物全眞を顯はす。正與麽の時。眞慈寂滅場を起たず。報化佛頭を坐斷する底の句。如何んが指陳せん。靈蹤元白雲の頂にあり。問訊す山中の舊主人。

其七　入塔（都管）

明知是者箇。開口道不得。明知不是者箇。開口却道得。坐斷兩重關。天然露風骨。百發百中。聖箭離弦。七穿八穴。湘南潭北。爲君幾下蒼龍窟。（恕中）

明かに是の者箇を知る。開口道ふことを得ず。明かに知る是れ者箇にあらず。開口却つて言ふことを得。坐斷す兩重の關。湘南潭北。君が爲に幾たびか下る蒼龍窟。

其八　入塔（西堂）

熾然說了。千聖耳聽。不及脫白露淨。更無一點相瞞。風細細月團團。高兮低兮。貴賣賤買。寬兮廓兮。山深水寒。（佛光）

熾然說了。千聖耳聽。脫白露淨なるに及ばず。更に一點の相瞞ずるなし。風細細月團團。高たり低たり。高く賣り賤く買ふ。寬たり廓たり。山深く水寒し。

其九　入塔（庵主）

五朝夫子太平僧。不レ纏諸方死葛藤一。潭北湘南層落落。長燃無縫塔中燈。（北磵）

五朝の夫子太平の僧。諸方の死葛藤に纏はされず。潭北湘南層落落。長へに燃ゆ無縫塔中の燈。

其一〇　入塔（上座）

火熱風動搖。水濕地堅固。四大忽分離。一眞無二覓處一。無二覓處一風骨露。多子塔前春正濃。聲聲杜宇啼二芳樹一。（育王）

火は熱し風は動搖。水は濕ひ地は堅固。四大忽ち分離す。一眞覓むる處無し。覓むる處無うして風骨露はる。多子塔前春正に濃なり。聲聲杜宇芳樹に啼く。

其一一　入塔（上座）

東嘉有二幽禽一。摶レ風擬二翺翺一。半途打二失翼一。衆觀皆悲傷。幸然靈骨在。何處可二收藏一。一擲太虛外。萬象含二秋光一。（石室）

東嘉に幽禽あり。風に摶つて翺翺を擬す。半途翼を打失す。衆觀て皆悲傷す。幸然靈骨在り。何處にか收藏すべき。一擲太虛の外。萬象秋光を含む。

其一二　入塔（上座）

是法非二思量分別之所一能解一。離念清淨。乃能證入。若果能證入。則森羅萬象。四大五蘊。根根塵塵。悉皆清淨。（指レ骨）只這個豈不二清淨一。既然如レ是。不レ得二動著一。元處二安着一。（無準）

是の法は思量分別の能く解する所にあらず。離念清淨。乃ち能く證入す。若し果して證入せば。則ち森羅萬象。四大五蘊。根根塵塵。悉く皆清淨。（骨を指して）只這個豈清淨ならんや。既に然も是くの如し。動著することを得ざれ。元安著に處す。

其一三　入塔（禪人）

元無毀譽古佛禪。清虛印空超智賢。雲開喜見仙蟾皎。圓融允契弘忍言。燦如寶珠。溫如璞玉。大用全提轉轆轆。二十八箇數不足。（拊骨）登高須入海底行。莫向湘南望潭北。（佛光）

元毀譽なし古佛禪。清虛空に印して智賢を超ふ。雲開いて喜び見る仙蟾の皎たることを。圓融允に契ふ弘忍の言。燦たること寶珠の如く。溫たること璞玉の如し。大用全提轉轆轆。二十八箇數へ足さず。（骨を拊して）高きに登る須らく海底に入つて行くべし。湘南に向つて潭北を望むこと莫れ。

其一　入祖堂（禪師）

是凡是聖本來空。出沒何曾有影蹤。若也撥開蓋面帛。色聲叢裡見眞容。伏惟某。胸次無棘。語言藏鋒。其才寔爲翹楚。其智亦非闒茸。嘉名飛四遠。秀氣薄蒼穹。佛光餘輝燦燦乎續燄。龍淵正脈滔滔乎流通。可與先輩並德。堪爲後昆啓蒙。建化門中且作此說。老師分上未足爲崇。諸仁者還見他眞實安身處麽。（捧牌）只箇公憑沒囊蓋。不妨奕世繼宗風。（夢窻）

是れ凡是れ聖本來空。出沒何んぞ曾て影蹤あらん。若し也蓋面の帛を撥開すれば。色聲叢裡眞容を見ん。伏して惟れば某。胸

次棘なく。語言鋒を藏す。其の才寔に翹楚たり。其の智亦闞茸にあらず。嘉名四遠に飛び。秀氣蒼穹に薄る。佛光の餘輝燦燦乎として燄を續き。龍淵の正脈滔滔乎として流通す。先輩と德を並ぶべく。後昆の爲に蒙を啓くに堪ふ。建化門中且らく此の說を作す。老師分上未だ祟と爲すに足らず。諸仁者還つて他の眞實安身の處を見るや。（牌を捧けて）只箇の公憑囊盍を沒す。妨げず奕世宗風を繼ぐことを。

其二　入祖堂（和尙）

涅槃後有大人相。籬菊山楓放大光。五逆兒孫果然在。綿綿瓜瓞正傳香。伏以某。業繼箕裘。材負棟梁。貫徹大達五味禪。事事物物銳機用。脫却無用一模範。言言句句巧詞章。加之。獨立睨看瑞龍孤頂。當軒坐斷圓覺妙場。恁麼不恁麼。不移步百城風月皆偏歷。不動身塵塵刹刹總家鄉。此是某平素受用底之閒絡索也。今日孝弟某。就某寺鎭牌於祖堂。大設齋筵。且道。即今某不起寂滅場。而覆蔭後昆底一句。諸仁者作麼生宣揚去。

（洪川）

涅槃後に大人の相あり。籬菊山楓大光を放つ。五逆兒孫果然として在り。綿綿瓜瓞正傳香し。伏して以れば某。業箕裘を繼ぎ。材棟梁を負ふ。大達五味の禪に貫徹し。事事物物機用銳なり。無用の一模範を脫却し。言言句句詞章巧なり。加之。獨立瑞龍の孤頂を睨看し。當軒圓覺の妙場を坐斷す。恁麼不恁麼。歩を移さずして百城の風月皆偏歷し。身を動かさずして塵塵刹刹總て家鄉。此れは是れ某が平素受用底の閒絡索なり。今日孝

弟某。某寺に就き牌を祖堂に鎮し。大に齋筵を設く。且らく道へ。即今某。寂滅場を起たず。後昆を覆蔭する底の一句。諸仁者作麽生か宣揚し去らん。

第三編　法要門

第一　佛祖會香語

其一　佛生會

古佛出興天日熙。獨尊無二丈夫兒。雲門毒手親摩頂。藥嶠婆心却嶮巇。（拈香）老頑此日又何謂。與衆瞻之且仰之。（頌極）

古佛出興天日熙まる。獨尊無二丈夫の兒。雲門の毒手親しく摩頂す。藥嶠の婆心却つて嶮巇。（香を拈じて）老頑此の日又何んとか謂はん。衆と之れを瞻且つ之れを仰ぐ。

其二　佛生會

不從兜率天邊下。豈自摩耶胎裡生。一瓦虛空無顯晦。
任他雲雨弄陰晴。（默應）

兜率天邊より下らず。豈に摩耶胎裡より生ぜんや。一瓦の虛空顯晦なし。任他ばあれ雲雨の陰晴を弄することを。

其三　佛生會

奇怪出胎第一聲。亂臣賊子自斯生。當初若遇韶陽棒。
天下至今見太平。（洪川）

奇怪出胎第一聲。亂臣賊子斯れより生ず。當初若し韶陽の棒に遇はゞ。天下今に至つて太平を見ん。

其四　佛生會

上天下天。多少落魄。托胎出胎。一場狼藉。（默應）
上天下天。多少の落魄。托胎出胎。一場の狼藉。

其五　佛生會

誰言灌沐令離垢。同證如來淨法身。不識甜茶盤裡客。
元來苦毒滿胸人。（洪川）

誰か言ふ灌沐垢を離れしむと。同證如來淨法身。識らず甜茶盤裡の客。元來苦毒滿胸の人。

其六　佛生會

周行七步。無脚踏箇什麼。天上天下。無手指箇什麼。
唯我獨尊。無口說箇什麼。見來總是自呈伎倆了也。且道。未出母胎以前。說法度生已畢底事。將何爲驗。（舉香）山桃落盡春回去。猶有子規枝上啼。（實巖）

周行七步。脚無うして箇の什麼をか踏まん。天上天下。手無うして箇の什麼をか指さん。唯我獨尊。口無うして箇の什麼をか

說かん。見來れば總て是れ自から伎倆を呈し了れり。且らく道へ。未だ母胎を出てざる以前。說法度生已に畢る底の事。何に

を將てか驗と爲ん。（香を擧して）山桃落ち盡きて春回り去るも。

猶子規あつて枝上に啼く。

其一　成道會

金鐵鑄成老古錐。明星一見眼如眉。謾言悉具如來相。

果是瞿曇厚面皮。（洪川）

金鐵鑄成す老古錐。明星一見眼眉の如し。謾に言ふ悉く如來の相を具すと。果して是れ瞿曇厚面皮。

其二　成道會

思量絕處眼睛突。一見明星特地新。正覺山頭老梅樹。

曉風吹動劫壺春。（頑極）

思量絕する處眼睛突す。一見明星特地に新なり。正覺山頭の老梅樹。曉風吹き動す劫壺の春。

其三　成道會

滿天白雪白皚皚。山後山前絕點埃。獨步寥寥誰是伴。

瑠璃殿上等閑回。（獨園）

滿天の白雪白皚皚。山後山前點埃を絕す。獨步寥寥誰か是れ伴。

瑠璃殿上等閑に回る。

其四　成道會

一麥一麻甚大難。蓬頭垢面轉無端。兒孫亦慣他辛苦。

猶帶殘星對曉寒。（獨園）

一麥一麻甚大難。蓬頭垢面轉た端しなし。兒孫亦他の辛苦に慣れ。猶殘星を帶びて曉寒に對す。

其五　成道會

六年苦屈極貧窮。富貴元來在厥中。只爲一朝寒徹骨。破襤衫裡裏春風。（洪川）

六年苦屈貧窮を極む。富貴元來厥の中にあり。只一朝寒骨に徹するが爲に。破襤衫裡春風を裏む。

其六　成道會

元來世界淸於鏡。何事指星發奇聲。雪上加霜黃面老。人天從是瞎眼睛。（洪川）

元來世界鏡よりも淸し。何に事ぞ星を指して奇聲を發す。雪上霜を加ふ黃面老。人天是れより眼睛を瞎す。

其七　成道會

蓬頭垢面。蘆膝鵲肩。曉出山去。飽誑人天。咦。久遠實成本來佛。再來不直半文錢。（默應）

蓬頭垢面。蘆膝鵲肩。曉に山を出て去る。飽まで人天を誑らかず。咦。久遠實成本來佛。再來半文錢に直ひせず。

其一　涅槃忌

四十九年三百會。五千餘卷多狼狽。臨行漫道一辭無。掩耳偸鈴還揑怪。揑怪揑怪。貴賣賤買。借問人天酬價誰。大龜來拜金棺外。（寶巖）

四十九年三百會。五千餘卷狼狽多し。行くに臨んで漫に道ふ一辭なしと。耳を掩ふて鈴を偸み還つて揑怪。揑怪揑怪。貴賣賤買。借問す人天價に酬ゆるものは誰そ。大龜來り拜す金棺の外。

其二　涅槃忌

咄箇吾家大覺皇。金軀賣弄八十霜。脫空漫語未レ知レ足。猶擡二雙趺一誑二飲光一。（洪川）

咄箇の吾家の大覺皇。金軀賣弄す八十霜。脫空漫語未だ足るを知らず。猶雙趺を擡げて飲光を誑らかす。

其三　涅槃忌

朕兆以前已不滅。兩儀之後又無生。鶴林至レ此太窮矣。強擡二雙趺一誑二衆生一。（洪川）

朕兆以前已に不滅。兩儀の後又無生。鶴林此に至つて太だ窮す。強ひて雙趺を擡げて衆生を誑らかす。

其四　涅槃忌

本來常住如如佛。寶印當レ空示二涅槃一。到頭一著刹那頃。擬議二千七百年。（頌極）

本來常住如如佛。寶印空に當つて涅槃を示す。到頭一著刹那の頃。擬議二千七百年。

其五　涅槃忌

不二是人間簷蔔芳一。亦非天上棘林香一。恒河沙數佛菩薩。裂破遼天鼻孔長。（乾峰）

是れ人間簷蔔の芳にあらず。亦天上棘林の香にあらず。恒河沙數の佛菩薩。裂破す遼天鼻孔の長さを。

其一　達磨忌

金將レ火驗。人將レ財驗。法孫將二此兜樓一炷一。要レ驗二這碧眼老胡一。是有鼻孔。是無鼻孔。（挿レ香良久。顧二視大衆一）山蒼蒼。水茫茫。人貧智短。馬瘦毛長。（佛光）

金は火を將て驗し。人は財を將て驗す。法孫は此の兜樓一炷を

將て。這の碧眼の老胡を驗せんと要す。是れ有鼻孔なりや。是れ無鼻孔なりや。（香を挿さみ良久し。大衆を顧視して）山蒼蒼。水茫茫。人貧にして智知く。馬瘦せて毛長し。

其二　達磨忌

分張皮髓論疎親。末後漫言救苦輪。熊耳藏身有何驗。只餘斷臂不成人。（洪川）

皮髓を分張して疎親を論ず。末後漫に言ふ苦輪を救ふと。熊耳に身を藏して何んの驗しかある。只餘す斷臂不成の人。

其三　達磨忌

咄者老胡。當門齒缺。蕭梁武帝不投機。可師空立庭前雪。一華五葉兮。烏焉成馬。二十七傳兮。證龜作鼈。絲毫無間。天地懸絶。（召大衆以手斫額）翩翩隻影擬何從。一回飲水一回噎。（佛光）

咄者の老胡。當門齒缺く。蕭梁の武帝投機せず。可師空しく立つ庭前の雪。一華五葉。烏焉馬と成る。二十七傳。龜を證して鼈と作す。絲毫間なく。天地懸絶す。（大衆を召し手を以て額を斫つて）翩々たる隻影何れよりすとか擬せん。一回水を飲めば一回噎せぶ。

其四　達磨忌

乾坤誰知祖師心。一葦渡江坐少林。對御横吹無孔笛。風高自是絶知音。（默子）

乾坤誰か知る祖師の心。一葦江を渡つて少林に坐す。御に對して横に吹く無孔の笛。風高うして自から是れ知音を絶す。

其五　達磨忌

隻履西邁。霜露幾降。木葉幾脱。回レ首音容猶在レ耳。因レ何打落當門齒。（佛光）

隻履西に邁いて。霜露幾たびか降り。木葉幾たびか脱す。首を回らせば音容猶耳にあり。何に因つてか打ち落す當門の齒。

其六　達磨忌

廓然無聖。何處惹二塵埃一。九年面壁。金刀剪不レ開。祖師何處分二皮髓一。笑殺韓獹逐レ塊來。（曹海）

廓然無聖。何處にか塵埃を惹かん。九年面壁。金刀剪れども開かず。祖師何んぞ必らずしも皮髓を分たん。笑殺す韓獹の塊を逐ひ來たることを。

其七　達磨忌

隻履西歸祖意深。單傳直指古猶レ今。更無二一句報恩分一。稽首家家觀自在。恭熱却此一瓣香一。驚二破吾藝祖達磨圓覺大師九年面壁閑夢一。穿二了盡大地人鼻孔一。全要レ到二共命同心一。未審諸禪德委悉麽。幻人身識。物我一純。（普濟）

隻履西に歸つて祖意深し。單傳直指古猶今のごとし。更に一句報恩の分なし。稽首す家家觀自在。恭しく此の一瓣香を熱却して。吾が藝祖達磨圓覺大師九年面壁の閑夢を驚破し。盡大地人の鼻孔を穿了し。全く共命同心に到らんことを要す。未審諸禪德還つて委悉すや。幻人の身識。物我一純。

其一　斷臂會

雪沒二腰間三尺强一。淚凍二眉際幾千行一。兒孫堪レ愧酬恩意。夜坐纔添數炷香。咦。此去少林曾不レ遠。半輪白月照二僧堂一。（默應）

雪は腰間を沒す三尺强。淚は眉際に凍る幾千行。兒孫愧づるに堪えたり酬恩の意。夜坐纔に添ふ數炷の香。咦。此去つて少林曾て遠からず。半輪の白月僧堂を照らす。

其二　斷臂會

雪腰刃臂早忘レ機。禮拜安心又是誰。少室休レ言得二吾髓一。無毛鷄子搏レ天飛。（頌極）

雪腰刃臂早く機を忘る。禮拜安心又是れ誰ぞ。少室言ふことを休めよ吾が髓を得たりと。無毛の鷄子天を搏つて飛ぶ。

其一　高祖忌

空手興レ業。老賊家法。活入二黃泉一。兒孫不レ乏。隱顯扶桑六十州。隨レ分各自皆成レ劫。（玄樓）

空手業を興す。老賊の家法。活きながら黃泉に入る。兒孫乏しからず。扶桑六十州に隱顯す。分に隨つて各自皆劫を成す。

其二　高祖忌

自二從乃祖陷二黃泉一。月挂秋空夜夜天。及レ到二境窮光盡處一。香爐一抹起二輕煙一。（默子）

乃祖が黃泉に陷つてより。月は挂く秋空夜夜の天。境窮光盡の處に到るに及んで。香爐一抹輕煙起る。

其三　高祖忌

開二闢叢林一創二永平一。新豐一曲自レ此鳴。至レ今四百年宗旨。匝地淸風脚下生。（月舟）

叢林を開闢し永平を創む。新豐の一曲此れより鳴る。今に至る四百年の宗旨。匝地淸風脚下に生ず。

其四　高祖忌

老梅樹老梅樹。爐薫不レ借二他家一。夜半正明。照レ心疎影横斜月。天曉不露。撲レ鼻暗香浮動花。和尚來也。空裡金蛇。（卍山）

老梅樹老梅樹。爐薫他家を借らず。夜半正明。心を照らす疎影横斜の月。天曉不露。鼻を撲つ暗香不動の花。和尚來也。空裡の金蛇。

其五　高祖忌

身心脱落無間獄。歴劫何曾有二出期一。諱景半千鬼家活。香雲堆裡展二雙眉一。（華頂）

身心脱落無間獄。歴劫何んぞ曾て出期あらん。諱景半千鬼家の活。香雲堆裡雙眉を展ぶ。

其一　太祖忌

古今定光現在前。婆娑松樹綠參レ天。圓明法眼無二私照一。祖苑增レ輝億萬年。鼎二新搭院一。彫二莊尊像一。屈二請清衆一。勤二修供養一。上來總是院主做得底三昧。山僧分上將レ甚酬レ恩。一香拈出須彌柱。佳氣氤氳覆大千。（卍山）

古今定光現在前。婆娑たる松樹綠天に參ず。圓明の法眼私照なし。祖苑輝を增す億萬年。搭院を鼎新し。尊像を莊彫す。清衆を屈請し。供養を勤修す。上來は總て是れ院主做得底の三昧。山僧分上甚にを將ってか恩に酬ゐん。一香拈出す須彌柱。佳氣氤氳大千を覆ふ。

其二　太祖忌

曾答二天王十種難一。言言明白玉珊珊。至レ今三百有餘歲。凛凛威風毛骨寒。（月舟）

曾て天王十種の難に答ふ。言言明白玉珊珊。今に至つて三百有餘歳。凛凛たる威風毛骨寒し。

其三　太祖忌

法身常住自儼然。蒼穹翠凝秋滿天。靈鑑猶新頂門眼。
正當三五月嬋娟。（奕堂）

法身常住自から儼然。蒼穹翠凝つて秋天に滿つ。靈鑑猶新なり頂門の眼。正當三五月嬋娟。

千光忌

葉上美名轟宋域。發揮戒法創心宗。狂瀾難復澆衰日。
濺淚一瓣仰祖風。（洪川）

葉上の美名宋域に轟く。戒法を發揮して心宗を創む。狂瀾復し難し澆衰の日。淚を濺いて一瓣祖風を仰ぐ。

大明忌

南宗最上大明禪。宮恠忽消一坐煙。密咒不如西來意。
文應天子荷雙肩。（洪川）

南宗最上の大明禪。宮恠忽ち消す一坐の煙。密咒は如かず西來の意。文應の天子雙肩に荷ふ。

聖一忌

此香不是日中牛糞。亦非夜裡栴檀。二三四七諸祖。嗅著裂破鼻端。恭惟開山國師。願輪稅駕馬臺東。佛敎分開興祖風。準的本朝諸大刹。權輿玆土立禪叢。眞規復復宋雙徑。素範還還國一翁。惟悳抱孫不抱子。當機通說亦通宗。賢臣明帝崇靈躅。傑閣隆樓著大功。今日再來挑惠日。大光明照十方空。（乾峰）

此の香是れ日中の牛糞にあらず。亦夜裡の栴檀にあらず。二三四七の諸祖。嗅著して鼻端を裂破す。恭しく惟れば開山國師。願輪駕を税す馬臺の東。佛敎分開して祖風を興す。準的す本朝の諸大刹。權輿玆の土禪叢を立つ。新規復復宋雙徑。素範還還國一翁。惟れ悳孫を抱いて子を抱かず。當機說に通じ亦宗に通ず。賢臣明帝靈躅を崇し。傑閣隆樓大功を著く。今日再來惠日を挑ぐ。大光明照十方空し。

其一　無學忌

攪動龍淵水。摶桑震雷霆。電收四十年。遺風轉更腥。這般惡迹掩不得。咸言圓照有寧馨。（挿香）是怨是恩吾不識。兜樓一瓣寄玄冥。（夢窻）

龍淵の水を攪動し。摶桑雷霆震ふ。電收まつて四十年。遺風轉た更に腥し。這般の惡迹掩ふこと得ず。咸言ふ圓照寧馨ありと。（香を挿んで）是れ怨是れ恩吾れ識らず。兜樓一瓣玄冥に寄す。

其二　無學忌

英靈驚目龍淵曉。凜冽粟肌鴈嶺風。欲擧佛光圓滿德。報秋一葉寂林叢。（洪川）

英靈目を驚かす龍淵の曉。凜冽肌に粟す鴈嶺の風。佛光圓滿の德を擧げんと欲すれば。秋を報ずる一葉林叢に寂たり。

佛國忌

荆棘滿地。吾也未窺師之藩籬。白浪滔天。吾也未見師之靈骨。曾無慈訓啓蒙。只遭怒罵呵咄。打初一步已錯。開眼墮佗窠窟。今朝既往不咎。隨例設箇忌齋。（挿香）從前怨恨百千緒。和此瓣香當下灰。（夢窻）

荆棘滿地。吾也未だ師の藩籬を窺はず。白浪滔天。吾也未だ師の靈骨を見ず。曾て慈訓啓蒙なし。只怒罵呵咄に遭ふ。打初一歩已に錯る。眼を開けば佗の窠窟に墮す。今朝既往は咎めず。例に隨つて箇の忌齋を設く。(香を挿んで)從前の怨恨百千緒。此の瓣香に和して當下に灰す。

臨濟忌(一千年忌)

風顛漢矣尿牀子。唐土扶桑惡毒禪。幸是兒孫無半箇。山門松秀已千年。(獨園)

風顛漢尿牀子。唐土扶桑惡毒の禪。幸に是れ兒孫半箇なし。山門松秀づ已に千年。

普明忌(五百年忌)

大智元來最下愚。一隅纔擧失三隅。兒孫亦闕英靈眼。五百餘年守古株。(獨園)

大智元來最も下愚。一隅纔に擧ぐれば三隅を失す。兒孫亦英靈の眼を闕き。五百餘年古株を守る。

其一　開山忌

生耶死耶。不道不道。蒼天悠悠。紅日杲杲。阿師靈骨兮。東邊西邊。洪波浩渺兮。白浪滔天。沈水一炷兮。恩怨歷然。儉生不孝兮。義出豐年。(佛光)

生か死か。道はじ道はじ。蒼天悠悠。紅日杲杲。阿師の靈骨。東邊西邊。洪波浩渺。白浪滔天。沈水一炷。恩怨歷然。儉は不孝を生じ。義は豐年を出だす。

其二　開山忌

塵劫來來秪這箇。誰言三十有三年。秋風捲地鷹峰夕。

孤月朗然遊碧天。咦。一眞未滅威音外。薫破石中一朶蓮。（曹海）

塵劫來來秖這箇。誰か言ふ三十有三年。秋風地を捲く鷹峰の夕。孤月朗然碧天に遊ぶ。咦。一眞未だ滅せず威音の外。薫破す石中一朶の蓮。

其三　開山忌

高高峰頂弄金鱗。末後風雷動刹塵。今覓慈容沒蹤跡。沒蹤跡處叵藏身。咦。停車坐愛楓林晚。霜葉紅於二月花。（洪川）

高高峰頂金鱗を弄す。末後風雷刹塵を動かす。今慈容を覓むるに沒蹤跡。沒蹤跡の處身を藏くし叵し。咦。車を停めて坐に愛す楓林の晚。霜葉は二月の花よりも紅なり。

其四　開山忌

擲地金聲三十年。振塗毒鼓鏖人天。今朝覿面難回避。一槾爛柴擎瘦拳。（洪川）

擲地金聲三十年。塗毒鼓を振つて人天を鏖しにす。今朝覿面回避し難し。一槾の爛柴瘦拳に擎く。

其五　開山忌

寬兮曠兮。寂兮寥兮。是恩是怨。何處求蹤。一甌香散秋天碧。滄海依然浪拍空。（佛光）

寬たり曠たり。寂たり寥たり。是の恩是の怨。何處にか蹤を求めん。一甌香散じて秋天碧に。滄海依然浪空を拍つ。

其六　開山忌

蘆華雪覆映長江。午夜月圓耀碧空。沈水一爐無限意。

霊源瑩徹暗流通。（良高）

蘆華雪を覆ふて長江に映ず。午夜月圓にして碧空に耀く。沈水一爐限りなきの意。霊源瑩徹して暗に流通ず。

第二　尊宿乃至亡僧香語

其一　尊宿忌

師之禪我參不得。師之峻機我湊泊不得。（良久擘胸）一棒一條痕。一度思量一度愁。一回飯水一回噎。今朝遠忌斯臨。畢竟將何爲報。（拈起香）爇此一瓣兜樓。也有甜也有苦。也有恩也有怨。屈屈。先師靈骨只者是。不須重入蒼龍窟。（佛光）

師の禪我れ參じて得ず。師の道我れ學んで得ず。師の峻機我れ湊泊することを得ず。（良久して胸を擘つて）一棒一條の痕。一掬一掌の血。一度思量して一度愁ふ。一回水を飲んで一回噎

ぶ。今朝遠忌斯に臨む。畢竟何を以てか報となさん。（香を拈起して）此の一瓣の兜樓を熱く。也甜あり也苦あり。也恩あり也怨あり。屈屈。先師の靈骨只者れ是。須ゐず重ねて蒼龍窟に入ることを。

其二　尊宿忌

道交不レ用苦相遭。勿レ謂幽明隔二一毫一。名實共稱仰二其德一。峥嶸恰似五峯高。（玄樓）

道交用ゐず苦に相遭ふことを。謂ふこと勿れ幽明一毫を隔つと。名實共に稱ふて其の德を仰ぐ。峥嶸として恰も五峯の高きに似たり。

其三　尊宿忌

此老。不レ居二正位一。豈墮偏圓一。正當忌景。將レ何供レ他。（拈香）古渡無レ人春月冷。蘆花投レ宿夜來眠。（默子）

此の老。正位に居せず。豈に偏圓に墮せんや。正當忌景。何にを以てか他に供せん。（香を拈じて）古渡人なく春月冷なり。蘆花に投宿して夜來眠る。

其四　尊宿忌

一瓣爛柴爐上熱。個中香氣異尋常。釋迦彌勒不レ能レ識。無鼻孔人聞始詳。爰供養某大和尚。以酬從前慈恩。恭惟某老大和尚。禪林木鐸。苦海蘭航。全提小室徽猷。一條白棒。均接七衆。廣宣祇園妙義。三寸紅舌。普蓋十方。豁達家風綿密密。陰森道德露堂堂。次第住數處名藍。如幽鳥遷喬木。斬新開一區靈地。似召伯留甘棠。槨漏雙趺。竟示滅度。袖收隻手。忽卷化場。獨謂全身難再覓。誰知徧界不曾藏。嘆。印破虛空深夜月。放光

何處不清涼。（玄樓）

一瓣の爛柴爐上に爇す。個中の香氣尋常に異る。釋迦彌勒識ること能はず。無鼻孔の人聞いて始めて詳なり。爰に某大和尚を供養し。以て從前の慈恩に酬ゆ。恭しく惟れば某老大和尚。禪林の木鐸。苦海の蘭航。少室の徽猷を全提す。一條の白棒。均しく七衆に接す。祇園の妙義を廣宣す。三寸の紅舌。普く十方を蓋ふ。豁達たる宗風綿綿密密。陰森たる道德露堂堂。次第數處の名藍に住す。幽鳥の喬木に遷るが如し。斬新一區の靈地を開く。召伯の甘棠を留むるに似たり。槨雙趺を漏らし。竟に滅度を示す。袖に隻手を收め。忽ち化場を卷く。獨り謂ふ全身再び覓め難しと。誰か知らん徧界曾て藏さゞることを。嚬。印破す虛空深夜の月。放光何處か清涼ならざらん。

其五　尊宿忌

（舉香）黃檗山中生本根。一株大樹是松源。拈爲沈水底時節。毒氣傷人徹四坤。恭惟某。憑此聞薰力。出佛界入魔界。憑此聞薰力。領花園作祖園。加之。眉間按金剛。截斷白拈賊。頂門瞎却正法眼。踏碎破沙盆。斷絕龍寶正脉。辜負天源深恩。無端死陷泥犁獄。一百年來受刑繁。千山躑躅春。玆値嚴忌。萬木杜鵑雨。殃及兒孫。（以香打圓相）香雪吹飄玻瓈盞。全不酬德親報寃。

（香を擧して）黃檗山中に本根を生ず。一株の大樹是れ松源。拈じて沈水と爲す底の時節。毒氣人を傷けて四坤に徹す。恭しく惟れば某。此の聞薰力に憑り。佛界を出でゝ魔界に入り。此

の聞薫力に憑り。花園を領じて祖園と作す。加之。眉間に金剛の剣を按じ。白拈賊を截斷す。頂門に正法眼を瞎却し。破沙盆を踏碎す。龍寶の正脉を斷絶し。天源の深恩に辜負す。端しなく死して泥犁獄に陷り。一百年來刑を受くること繁し。千山躑躅の春。玆に嚴忌に値ふ。萬木杜鵑の雨。殃兒孫に及ぶ。（香を以て圓相を打して）香雪吹き飄へす玻瓈の盞。全く德に酬ゆるにあらず親しく寃に報ゆ。咦。

其六　尊宿忌

昂然一出掣宗綱。已墜玄風又大颺。霹靂駭聲塗毒鼓。梅檀避氣返魂香。無人不謂老和尚。有地可稱古道場。螺蛤遂眠何處去。難江依舊水茫茫。（玄樓）

昂然一出宗綱を掣ぐ。已墜の玄風又大に颺る。霹靂聲を駭かす塗毒鼓。梅檀氣を避く返魂香。人の老和尚と謂はざるなく。地の古道場と稱すべきあり。螺蛤遂に眠つて何處に去る。難江舊に依つて水茫茫。

其一　世代忌

頂門一目異凡庸。生鐵面皮厚萬重。戢化三年磨不磷。霜天獨秀嶺頭松。（玄樓）

頂門の一目凡庸に異る。生鐵の面皮厚さこと萬重。化を戢むること三年磨せども磷かず。霜天獨り秀づ嶺頭の松。

其二　世代忌（三百回忌）

少室聯燈三百年。任地僧史脫其傳。金崎燕坐喧人口。無字碑文今古鮮。（曹海）

少室燈を聯ぬ三百年。任地あれ僧史其の傳を脫することを。金

崎燕坐人口に喧すし。無字の碑文今古鮮なり。

其三　世代忌

中興法席咬牙關。提撕僉言功獨完。一旦毘嵐急吹過。畫梅映月上欄干。（拈香）無味湯茶無義語。山漫漫也水漫漫。看臥牀內。有個鼾睡之人。（頌極）

法席を中興して牙關を咬む。提撕僉言ふ功獨り完しと。一旦毘嵐急に吹き過ぐ。畫梅月に映じて欄干に上る。（香を拈じて）無味の湯茶無義の語。山漫漫水漫漫。臥して牀內を看れば。個の鼾睡の人あり。

先住忌

一夜全提金剛杵。和尚腕頭大有力。機前擊碎鐵心肝。和根吹倒海棠花。大休大歇自知了。老漢曷合取狗口。枕上也無閒夢安。依後語見大人相。今日忌辰。著得四轉語酬慈恩。伏願海容。（大應）

一夜全提す金剛の杵。和尚の腕頭大に力あり。機前擊碎す鐵心肝。根に和して吹倒す海棠の花。大休大歇自知了。老漢曷んぞ狗口を合取せん。枕上也閒夢の安きなし。後語に依つて大人の相を見る。今日忌辰。四轉語を著得して慈恩に酬ゆ。伏して願くは海容。

其一　先師忌

傳來佛祖不傳傳。興盛曹溪滴滴禪。水月空華弗留跡。偉光照徹界三千。（洪川）

傳來す佛祖不傳の傳。興盛す曹溪滴滴の禪。水月空華跡を留めず。偉光照徹す界三千。

其二　先師忌

生不道兮死不道。法堂不用弔先師。（靈源）難掩黃金骨。高挂林間無影枝。（默子）

生と道はじ死と道はじ。法堂用ゐず先師を弔することを。靈源掩ひ難し黃金の骨。高く挂く林間無影の枝。

其三　先師忌

向去本非速。却來又沒遲。先師行履處。自是妙難思。佛眼從來覷不見。須知魔外實難窺。此日有破家子欲證父羊。大衆要見麽。（豎起拂子）日面月面。虛空閃電。（曹海）

向去本速さにあらず。却來又遲さこと沒し。先師行履の處。自から是れ妙難思。佛眼從來覷れども見えず。須らく知るべし魔外實に窺ひ難きことを。此の日破家の子あつて父羊を證せんと欲す。大衆見んと要すや。（拂子を豎起して）日面月面。虛空閃電。

其四　先師忌

本無出沒。法身無爲。大悲願力。去來以時。去年末後。苦口提持。擬議之際。斗轉星移。忌辰重痛哭。雙眼血淋漓。嵩山長突兀。仰止欽尊儀。（拈香）陳爛枯柴恁麽舉。也勝巴陵三轉語。（頌極）

本出沒なし。法身無爲。大悲の願力。去來時を以てす。去年末後。苦口提持。擬議の際。斗轉じ星移る。忌辰重ねて痛哭す。雙眼血淋漓。嵩山長へに突兀。仰止尊儀を欽ず。（香を拈じて）陳爛枯柴恁麽に舉す。也巴陵の三轉語に勝る。

其五　先師忌

獨立西風恨入笳。一聲一曲憶胡家。幾回消息不通得。
極目白雲天一涯。（東皐）

獨り西風に立つて恨み笳に入る。一聲一曲胡家を憶ふ。幾回消息通じ得ず。極目白雲天の一涯。

其六　先師忌（十月忌）

莫言嫩桂久昌昌。此日凋落冷似霜。絶筆不禁尼父涙。登堂空濕沼公裳。千鈞巨鼎憑誰擧。一髪如絲有幾長。最是傷心無限處。一年一度獨燒香。（永覺）

言ふこと莫れ嫩桂久昌昌たりと。此の日凋落霜よりも冷なり。筆を絶して禁えず尼父の涙。堂に登つて空しく濕ふ沼公の裳。千鈞の巨鼎誰に憑つてか擧げん。一髪絲の如く幾ばくか長きことあらん。最も是れ傷心限りなき處。一年一度獨り燒香す。

其一　某和尚忌（五十回忌）

咄這惡情悰老漢。五十年際匿全身。忌齋叵奈春風面。露出本來無位眞。（洪川）

咄這の惡情悰老漢。五十年際全身を匿す。忌齋奈んともし叵し春風の面。露出す本來無位の眞。

其二　某和尚忌（一回忌）

倒跨業風入九泉。眉頭因甚尚拄天。遺吾沒柄龜毛拂。今日拈來是一年。（玄樓）

倒に業風に跨つて九泉に入る。眉頭甚んに因つてか尚天を拄ふ。吾に遺す沒柄龜毛の拂。今日拈じ來たる是れ一年。

其三　某和尚忌（三回忌）

三載相依何所求。抱毒歸來恨未休。石鼓山頭重會處。

不レ妨擧出報寃仇。（永覺）

三載相依る何んの求むる所ぞ。毒を抱き歸り來たつて恨未だ休せず。石鼓山頭重ねて會する處。妨げず擧出して寃仇に報ゆることを。

其一　亡僧忌

此香。僊李盤根非凡草木。猗蘭奕葉同其芬芳。趙州指爲庭前柏樹。臨濟栽作天下蔭凉。西來祖意不遮掩。一朶曇華遍界香。某。譜系出於將相之尊貴。志氣任於佛祖之宗綱。造化鍾其神秀。星斗耀其文章。藏睡菸菟之威獰。大藏小藏時時撥轉。具小釋迦之機辯。横説竪説塵塵宣揚。四十五年大夢忽破。千百億身應化無方。伏願。不レ捨悲心。再挑末運之慧炬。彌堅願力。重爲苦海之慈航。（絶海）

此の香。僊李盤根凡草木にあらず。猗蘭奕葉其の芬芳を同うす。趙州は指して庭前の柏樹と爲し。臨濟は栽えて天下の蔭凉と作す。西來の祖意遮掩せず。一朶の曇華遍界香し。某。譜系將相の貴尊に出て。志氣佛祖の宗綱に任ず。造化其の神秀を鍾め。星斗其の文章を耀かす。睡菸菟の威獰を藏し。大藏小藏時時撥轉す。小釋迦の機辯を具へ。横説竪説塵塵宣揚す。四十五年大夢忽ち破れ。千百億身應代無方。伏して願はくは。悲心を捨てず。再び末運の慧炬を挑げ。彌願力を堅うし。重ねて苦海の慈航と爲らんことを。

其二　僧亡忌（七回忌）

曉破閒眠送梅雨。山林潤足柘榴緋。七年呈露舊公案。

好向乃翁語秘機。雖然與麽。即今正當供養底一句。作麽生擧。人行如人。鳥飛似鳥。咦。（洪川）

曉閒眠を破つて梅雨を送る。山林潤ひ足つて柘榴緋なり。七年呈露す舊公案。好し乃翁に向つて秘機を語るに。然も與麽なりと雖も。即今正當供養底の一句。作麽生が擧げん。人行いて人の如く。鳥飛んで鳥に似たり。咦。

第三　諸會香語

其一　轉般若經祈禱會

鶯語波羅蜜。梅花般若經。頭頭繙卷了。天下更清寧。（獨園）

鶯語波羅蜜。梅花般若經。頭頭卷を繙き了る。天下更に清寧。

其二　轉般若經祈禱會

翠柳糸柔見性靈。黃鶯語巧聽斯經。須知般若波羅蜜。春入平田麥浪青。（獨園）

翠柳糸柔にして性靈を見る。黃鶯語巧にして斯の經を聽く。須らく知るべし般若波羅蜜。春平田に入つて麥浪青し。

其三　轉般若經祈禱會

妄雲纔喝散。廓落朗乾坤。溪水無涓滴。因何印月痕。（默應）

妄雲纔に喝散すれば。廓落として乾坤朗なり。溪水涓滴なし。何んに因つてか月痕を印す。

轉般若經會

六百金文將打開。祥煙瑞氣意佳哉。積善餘慶果何在。露柱燈籠笑滿腮。（洪川）

六百の金文將に打開せんとす。祥煙瑞氣意佳なる哉。積善の餘慶果して何くにかある。露柱燈籠笑ひ滿腮。

授戒會

曾無一法奏微功。供佛齋僧畢竟空。掃却天堂幷地獄。含靈戲樂大藏中。（獨園）

曾て一法の微功を奏するなし。佛に供じ僧に齋す畢竟空。掃却す天堂幷びに地獄。含靈戲樂す大藏の中。

應供會

猛虎呼風林外嘯。大龍驅雨鉢中跳。請看尊者神通力。頓使福田長慧苗。（默應）

猛虎風を呼んで林外に嘯き。大龍雨を驅つて鉢中に跳る。請ふ看よ尊者神通の力。頓に福田をして慧苗を長ぜしむ。

其一　水陸會

存兮亡也無遮會。飽矣餓焉甘露門。流水閒雲供養足。（獨園）

此香薫徹盡乾坤。存や亡や無遮會。飽や餓や甘露門。流水閒雲供養足る。此の香

薫徹す盡乾坤。

其二　水陸會

這箇栴檀解脫香。鑊湯爐炭化清涼。怨親平等無遮會。遊戲同昇正覺場。（獨園）

這箇の栴檀解脫香。鑊湯爐炭清涼と化す。怨親平等無遮會。遊戲同じく昇る正覺場。

其三　水陸會

水中叫渴暗昏人。飽裡悲飢迷倒身。我爲老婆心太切。盤泉桶飯結正因。雖然與麽。畢竟以甚爲據。黃金鑄就玉鸚鵡。一聲聲作鷓鴣鳴。（洪川）

水中渴を叫ぶ暗昏の人。飽裡飢を悲しむ迷倒の身。我が老婆心太だ切なるが爲めに。盤泉桶飯正因を結ぶ。然も與麽なりと雖も。畢竟甚を以てか據と爲さん。黃金鑄就す玉鸚鵡。一聲聲は鷓鴣の鳴を作す。

其四　水陸會

十方法界寶樓閣。六合四維甘露城。一片眞心勝妙力。無邊飯食濟群生。（洪川）

十方法界寶樓閣。六合四維甘露城。一片の眞心勝妙の力。無邊の飯食群生を濟ふ。

其五　水陸會

法雨濕時貪火滅。慧光輝處愛河乾。誰知藏眼二童子。頓使阿孃登佛壇。咦。請看寶樓閣中樂。清風拂熱絕燕欄。（默應）

法雨濕ふ時貪火滅す。慧光輝く處愛河乾く。誰か知らん藏眼の

二童子。頓に阿孃をして佛壇に登らしむ。咦。請ふ看よ寶樓閣中の樂。清風熱を拂つて遮欄を絶す。

其一　盂蘭盆會

滿盤水似天甘露。一桶飯如王妙供。來饗吾家寶樓閣。百由旬內絶衰凶。（洪川）

滿盤の水は天の甘露に似たり。一桶の飯は王の妙供の如し。來り饗けよ吾が家の寶樓閣。百由旬內衰凶を絶す。

其二　盂蘭盆會

荷浦秋清白露香。龍峰樹密綠蔭凉。倒懸名事今何在。器界三千等放光。（奕堂）

荷浦秋清うして白露香ばし。龍峰樹密にして綠蔭凉し。倒懸の名事今何くにかある。器界三千等しく光を放つ。

放生會

聞其聲食其肉。豈君子之忍心。放之山畜之池。乃仁人之厚德。蓋有知必爲同體。而血屬皆我宗親。夫豈望報于持環。實將興仁于解網。（入佛事）伏願。悟無生之旨。證不壞之身。世壽益堅。長趨菩提之路。色身常健。益弘普濟之舟。更祈。所放生命。入林密入山深。各得其所。在囿伏在沼躍。惟適之安。同登解脫之門。吾入安養之國。（永覺）

其の聲を聞き其の肉を食ふ。豈に君子の忍心ならんや。之を山に放ち之を池に畜ふ。乃ち仁人の厚德。蓋し必らず同體たることを知るあらば。血屬皆我が宗親。夫れ豈に報を持環に望まんや。實に將に仁を解網に興さんとす。（佛事を入る）伏して願は

くば。無生の旨を悟り。不壞の身を證し。世壽益堅く。長へに菩提の路に趨り。色身常に健に。益普濟の舟を弘めんことを。更に祈る。放つ所の生命。林の密なるに入り山の深きに入り。各其の所を得。囿にあつては伏し沼にあつては躍り。惟適に安んず。同じく解脫の門に登り。共に安養の國に入らんことを。

釋迦佛像開光

一見明星失眼睛。山僧拾得久懸楹。（以筆作點勢）即今逢著試完趙。依舊靈光眉底生。（玄樓）

一見明星眼睛を失す。山僧拾ひ得て久しく楹に懸く。（筆を以て點勢を作して）即今逢著して試みに趙を完うすれば。舊に依つて靈光眉底に生ず。

大權達磨像開光

西邊底是閒達磨。東邊底是閒鬼神。腕頭些子運神力。挽回少林五葉春。奉三寶弟子某。忽修現今福善。豫結將來正因。奉刻彫大權菩薩並達磨大師像。以安置於當齋矣。共惟。大權修理菩薩。親受靈山付屬。護法安人。昭昭靈鑑。日月斬新。吾鼻祖達磨圓覺大師。掃除六宗橫徑。芟蕀三藏荊榛。西來直指。拯濟迷津。上來葛藤且致。即今點眼一句。作麼生指陳。（以筆點眼）向一毫端纔點發。頂門正眼絕纖塵。（川僧）

西邊底は是れ閒鬼神。腕頭の些子神力を運らし。挽回す少林五葉の春。奉三寶第子某。忽ち現今の福善を修し。豫じめ將來の正因を結ぶ。大權菩薩並びに達磨大師の

像を刻彫し奉つり。以て當齋に安置す。共に惟みるに。大權修理菩薩。親しく靈山の付屬を受け。護法安人。昭昭靈鑑。日月斬新。吾が鼻祖達磨圓覺大師。六宗の横徑を掃除し。三藏の荆榛を芟荑す。西來の直指。迷律を拯濟す。上來の葛藤は且らく致く。即今點眼の一句。作麼生が指陳せん。(筆を以て點眼して)一毫端に向つて纔に點發すれば。頂門の正眼纎塵を絶す。

觀音菩薩像開光

(秉筆)八萬四千清淨眼。一毫頭上放光寒。唯因大地人無識。未免山僧點出看。(點)(玄樓)

(筆を秉つて)八萬四千の清淨眼。一毫頭上光りを放つて寒ましゝ。唯大地人の識るなきに因つて。未だ免かれず山僧が點出して看せしむることを。

地藏菩薩像開光

擎珠賑濟貧家苦。聲錫驚回長夜眠。(以筆作點勢)一隻高懸心地月。眼明阿字不生天。(玄樓)

珠を擎けて賑濟す貧家の苦。錫を聲らして驚回す長夜の眠。(筆を以て點勢を作して)一隻高く懸ぐ心地の月。眼は明かなり阿字不生の天。

跋陀羅菩薩像開光

妙觸宣明。通身眼睛。威音那畔。三昧圓成。(以筆一點)毫端一滴靈源水。支派暗流遍界清。(月舟)

妙觸宣明。通身眼睛。威音那畔。三昧圓成。(筆を以て一點して)毫端一滴靈源の水。支派暗に流れて遍界清し。

文殊菩薩像開光

（秉筆）斷木拈來下一刀。文珠忽現跨金毛。豁開七佛以前眼。見處依然高又高。（點）（玄樓）

（筆を秉つて）斷木を拈じ來つて一刀を下せば。文珠忽ち現じて金毛に跨がる。豁開す七佛以前の眼。見處依然高うして又高し。

不動明王像開光

表降魔相。現忿怒躬。金剛寶劍。割截虛空。龜毛繩索。縛著清風。爍迦羅眼點眼了。大焰靈光遍界紅。（月舟）

降魔の相を表し。忿怒の躬を現ず。金剛の寶劍。虛空を割截す。龜毛の繩索。清風を縛著す。爍迦羅眼點眼し了る。大焰虛空遍界紅なり。

辯才天像開光

妙辯滔滔波涌波。琵琶一曲震河沙。側聆天衆今何在。只見虛空獨唱和。（曹海）

妙辯滔滔波を涌し。琵琶一曲河沙に震ふ。聆を側つれば天衆今何くにか在る。只見る虛空獨り唱和することを。

韋駄天像開光

是大菩薩。示現天身。親承佛勅。護法安人。金剛寶杵。降伏魔群。圓明慈眼。救渡迷津。且道。作麼生是慈眼開明一句。（乃點）一雙日月毫頭耀。永轉法輪與食輪。（良高）

是の大菩薩。天身を示現し。親しく佛勅を承け。法を護し人を安んず。金剛の寶杵。魔群を降伏し。圓明の慈眼。迷津を救渡す。且らく道へ。作麼生か是れ慈眼開明の一句。（乃ち點じて）一雙の日月毫頭に耀き。永く法輪と食輪とを轉ず。

觀音菩薩入佛

中興輪奐古禪宮。添得人天歸仰隆。此裏獨尊觀自在。出圓通復入圓通。（玄樓）

中興輪奐古禪宮。添へ得たり人天歸仰の隆んなることを。此の裏獨尊觀自在。圓通を出で復圓通に入る。

鼓山天王殿上梁

棟隆斯吉。横開解脱之門。護法儼臨。永作金湯之固。示衆生歸元之路。防僧海外侮之侵。自然海晏河清風和日暖。更有究竟圓滿一句。作麼生道。坐斷千峰平若掌。頓教大地盡黄金。（永覺）

棟隆斯れ吉。横に解脱の門を開く。護法儼として臨み。永く金湯の固を作す。衆生歸元の路を示し。僧海外侮の侵を防ぐ。自然に海晏河清風和に日暖なり。更に究竟圓滿の一句あり。作麼生か道はん。千峰を坐斷して平かなること掌の若く。頓に大地をして盡く黄金たらしむ。

鼓山大雄殿上梁

白雲峰下紫雲屯。金殿崔嵬奉至尊。石鼓一聲天地震。靈源澎湃喜長存。（永覺）

白雲峯下紫雲屯す。金殿崔嵬至尊を奉ず。石鼓一聲天地震ふ。靈源澎湃として長へに存せんことを喜ぶ。

大殿上梁

莖艸拈來挿太空。忽然現出法王宮。法王法令無窮盡。凡聖同居等爲叢。（曹海）

莖艸拈じ來つて太空に挿む。忽然現出す法王宮。法王の法令窮

盡なし。凡聖同居等しく叢を爲す。

掛圓覺興聖禪寺額

大解脫門。無在不在。十虛無際。闊闊自由。大檀那建立圓覺道場。成就廣大佛事。梵宇挿霄漢。橫呑覩史夜摩。鐘鼓振坤維。攪動浮幢刹海。願力所持。福被一切。六凡四聖。何莫由斯。便見海晏河淸。雨順風調。野老謳歌。漁人鼓棹。只如今日高揭寺額。有何祥瑞。金色照開三界外。玉毫長繞五須彌。（佛光）

大解脫門。在不在なし。十虛無際。闊闊自由。大檀那圓覺道場を建立し。廣大の佛事を成就す。梵宇霄漢に挿み。覩史夜摩を橫呑す。鐘鼓坤維に振ひ。浮幢刹海を攪動す。願力の所持。福一切に被る。六凡四聖。何んぞ斯れに由るなけん。便ち見る海晏河淸。雨順風調。野郎謳歌し。漁人鼓棹することを。只今日高く寺額を揭ぐるがごときは。何んの祥瑞かある。金色照開す三界の外。玉毫長へに繞る五須彌。

鑄鐘落慶

新離槖籥上樓臺。鴻韵悠揚落九垓。滿地淸霜隨扣滅。一天明月應呼來。罰王遂脫劍輪苦。芬子忽辭槐國回。永助娑婆敎化體。雄雄諸谷碧崔嵬。（玄樓）

新に槖籥を離れて樓臺に上る。鴻韵悠揚九垓に落つ。滿地の淸霜扣くに隨つて滅し。一天の明月呼ぶに應じて來る。罰王遂に劍輪の苦を脫し。芬子忽ち槐國を辭して回る。永く娑婆敎化の體を助けて。雄雄たる諸谷碧崔嵬。

寺院修造後謝土

伽藍地上。偶葺蓋頭之所。善逝座下。庸申稽首之恭。俯露丹誠。仰塵紺鑒。切念某。塵寰擾擾。世路孜孜。幸就般若緣中。普資衆力。便向菩提場裡。立竪把茅。既遂落成之功。敢後報德之典。（入佛事）以茲寸善。仰答三寶之帡幪。廣酧萬靈之護衛。伏願。皇圖永固。帝壽益堅。居者以安。共遊三摩之域。施者蒙利。同成解脫之因。合境而共沐殊休。有生而咸沾至澤。（永覺）

伽藍地上。偶葺頭の所を葺き。善逝座下。庸て稽首の恭を申ぶ。俯して丹誠を露はし。仰いて紺鑒を塵す。切に念ふに某。塵寰擾擾。世路孜孜。幸に般若の緣中に就き。普く衆力に資り。便ち菩提場裡に向ふ。把茅を立竪し。既に落成の功を遂ぐ。敢て報德の典を後ぐ。（佛事を入る）茲の寸善を以て。仰いて三寶の帡幪に答へ。廣く萬靈の護衛に酧ゆ。伏して願はくば。皇圖永く固く。帝壽益堅く。居者以て安く。共に三摩の域に遊び。施者利を蒙むり。同じく解解の因を成じ。合境共に殊休に沐し。有生咸く至澤に沾はんことを。

春日祈雨

元運方回。已際發生之候。春膏未沛。莫施栽植之功。惟俟來蘇。敢忘虔禱。切念某等。服勤東作。効計西成。適逢青帝之司時。忽致旱魃之爲虐。病綠悴漲波之麥。敗黃枯出水之秧。春耕之際如斯。秋稔之期何若。謹修梵典。用懇聖慈。（入佛事）伏願。風伯効靈。雨師供職。洒彌天之潤澤。沛然而施。洋然而流。回易地之歡聲。憂者以樂。病者以愈。（永覺）

元運方に回り。已に發生の候に際す。春膏未だ沛はず。栽植の功を施すなし。惟來蘇を俟つ。敢て虔禱を忘れん。切に念ふに某等。東作に服勤し。西成を効計す。適青帝の時を司どるに逢ひ。忽ち旱魃の虐を爲すを致す。病綠漲波の麥を悴へしめ。敗黃出水の秧を枯らす。春耕の際斯の如くんば。秋稔の期何若んぞ。謹んで梵典を修し。用て聖慈を懇す。(佛事を入る)伏して願はくは。風伯靈を効し。雨師職を供し。彌天の潤澤を洒ぎ。沛然として施さ。洋然として流れ。易地の歡聲を回らし。憂者は以て樂しみ。病者は以つ愈へんことを。

夏日祈雨

日熾朱光。孰禦流金之苦。田焦青稼。將無炊玉之期。仰禱獅臺。願憐蟻悃。切念某等。衡茅苟活。穡稼知艱。欣然畢力于春耕。忽爾驚心于夏旱。惟禾穟穟。漸極豳野之黃。彼黍離離。將稿周原之白。至所極矣。何苦如之。謹率群氓。特歸三寶。(入佛事)伏願。起蛟龍之蟄。震雷電之威。沛然下。洋然流。撲紅爐焰。出而作。入而息。挽回綠野之和。(永覺)

日朱光より熾んなり。孰れか流金の苦を禦がん。田青稼を焦し。將に炊玉の期なからんとす。仰いで獅臺に禱る。願はくは蟻悃を憐れまんことを。切に念ふに某等。衡茅活を苟す。穡稼艱を知る。欣然として力を春耕に畢し。忽爾として心を夏旱に驚かす。惟禾穟穟。漸く豳野の黃を悴へしめ。彼の黍離離。將に周原の白を稿はんとす。至る所極まる。何の苦か之に如かん。謹んで群氓を率ゐ。特に三寶に歸す。(佛事を入る)伏して願はく

は。蛟龍の蟄を起し。雷電の威を震ひ。沛然として下り。洋然として流れ。紅爐の焰を撲ち。出て丶作し。入つて息ひ。綠野の和を挽回せんことを。

謝雨

伏念。嘆其乾矣。苦憂心之如熏。雨以潤之。喜應聲之若響。田隴有收成之望。郊原見春色之回。雖大聖不自以爲功。而下情敢忘于酧德。乃陳象教。用昭蟻誠。（入佛事）既沾既足。既優既渥。且沐前恩。實發實秀。實好實堅。尙祈後獲。（永覺）

伏して念ふに。嘆き其れ乾く。憂心の熏ずるか如きを苦む。雨以て之を潤す。應聲の響の若きを喜ぶ。田隴收成の望みあり。郊原春色の回るを見る。大聖自から以て功と爲さずと雖も。下情敢て德に酧ゆるを忘れん。乃ち象教を陳し。用て蟻誠を昭はす。（佛事を入る）既に沾ひ既に足り。既に優既に渥。且つ前恩に沐す。實に發し實に秀で。實に好く實に堅し。尙はくは後獲を祈る。

祈晴

淫雨謂之霖。實妨農務。慧日破諸暗。庸叩佛慈。陳象教以歸依。冀烏輪之助耀。切念某等。樂歲止期于田稼。兼旬奈苦于簷花。夜息蓬居。厭聽滴堦之韻。朝耕禾隴。忍觀衝岸之流。可勝大過之憂。爰啓中孚之信。（入佛事）伏願。縱諸陽閉諸陰。暫補蒼天之漏。宣其光豁其翳。融爲易地之和。（永覺）

淫雨之を霖と謂ふ。實に農務を妨ぐ。慧日諸暗を破る。庸て佛

慈を叩く。象教を陳し以て歸依す。烏輪の耀を助けんことを冀がふ。切に念ふに某等。樂歳止田稼を期す。兼旬簷花に苦しむを奈ん。夜蓬居に息ふて。滴堦の韻を聽くことを厭ひ。朝に禾隴に耕して。衝岸の流れを觀るに忍びん。大過の憂に勝ゆべけんや。爰に中孚の信を啓す。(佛事を入る)伏して願はくば。諸陽を縱にして諸陰を閉ぢ。暫らく蒼天の漏を補ひ。其の光を宣べ其の翳を豁にし。融に易地の和を爲さんことを。

謝晴

雨霖霑而爲害。小民惟日怨咨。日荏苒以騰晶。我佛不可思議。萬物荷當天之炤。群生瞻特地之明。如是蒙恩。云何報德。(入佛事)伏願。有始則有其終。自此三登而樂歳。無過亦無不及。繼茲庶徵以若時。(永覺)

雨霖霑ふて害を爲す。小民惟日に怨咨し。日に荏苒し以て晶を騰ぐ。我か佛思議すべからず。萬物當天の炤を荷ひ。群生特地の明を瞻る。是の如く恩を蒙むる。云何んが德に報ゐん。(佛事を入る)伏して願はくは。始めあるときんば則ち其の終りあり。此れより三登して歳を樂ましめ。過ぎたるなく亦及ばざることなからんことを。茲に繼いで庶はくは徵し以て時の若くならんことを。

法華經千部供養會

廣長舌相覆乾坤。半滿偏圓誰子孫。却云止止不須說。白日青天雷電奔。(挿香)栴檀林中無雜樹。九曲黃河徹底渾。(川僧)

廣長舌相乾坤を覆ふ。半滿偏圓誰が子孫ぞ。却つて云ふ止止